
妖精郷幻想忌憚

クラウン・クラウン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精郷幻想忌憚

【Nコード】

N9398Z

【作者名】

クラウン・クラウン

【あらすじ】

我々が現実と呼ぶ世界と対になる世界：アヴァロン。幻想と呼ばれる生き物が生息し、存在を否定された魔法が存在し、そして…取り換えっ子がいた。

自分に取り付いた精霊・妖精と自分の身を交換する事で人外の力と能力を行使するチェンジリング…その中でも精霊と呼ばれる存在を宿す少女…不思議な夢の声に少年が導かれる時…世界の境界線は崩壊し、二人は邂逅する。

（以前投稿していたものですが、いろいろな事情で一度削除した物を加筆修正して投稿します。）

起

世界は二面性で出来ている。

プラスに対するマイナスのように…火に対する水ののように…男に対する女のように…光に対する闇のように…二律背反にも似た対極の存在で成り立っている……では、この世界の対極は何処にあるのだろうか？…案外、その境界線は薄くもろいものかもしれない。

人の手の入っていない、原生の森に分け入ったことはあるだろうか？樹木は日の光を求めて枝葉を伸ばし、地面を根で抉って凹凸を作り出す。その根元では多種多様な草が地面を覆い隠し、虫や獣の命あるものは常に弱肉強食という自然の掟の中で生きている。

人の安易な立ち入りを拒むそんな場所、無秩序と言う名の秩序の世界である。

何が言いたいのかと言えば……少なくとも、年頃の少女がたった一人で全力疾走するような場所ではないという事だ。

「くそ、抜かった。こんな場所で、しかもランドと離れてしまうなど、不覚…」

形のいい唇から、乱れた息とともに悔しげな言葉が吐き出される。凜とした響きの声に相応しく、可愛いと言うよりも凛々しいと評するべき容姿に、白磁のように白い肌を飾る水色の髪と澄んだ湖面のように深く蒼い瞳はたとえ森の中であっても映える。

同時に、見る目が有るものが見れば、彼女の知性を感じさせる深い蒼の瞳で周囲を警戒し、荒れた地面の上を疾走しながら、平地と変わらないレベルで重心が驚くほどに安定している事を見て取るだろう…明らかに素人の動きでない。

それに加えて、彼女の右手に持っている剣…所謂ロングソードと呼

ばれる剣を見れば、彼女が武人かそれに類する者、あるいはそう言った訓練を受けた者であることを想像する事は容易いはずだ。

「それにしても…」

少女の顔に浮かんだ表情の名を不敵、あるいは苦笑と呼ぶ。

「今日は何か？人生で最も運氣が停滞する日か何かか！？出かけるときの水晶占いじゃそんなことなにも言っただろ！？」

いきなり、少女がぶつちやけた。

誰に、あるいは何に対する愚痴かを知りようはないが、そもそもにして彼女の状況がただ事ではないのだ。

言わなきゃやってられない事もあるのだろう。口調に違和感がないところを見ると、これが彼女の地かもしれない。

「しかも、こんな時に狙ってこなくても良いではないか！！何か？私が女らしい格好をしたことに文句でもあるのか！？普段着飾らなくても16の乙女だぞ！？」

少女はスカートの裾を持ち上げて走っている。淑女としてははしたない格好だが、彼女もやりたくてやっているわけではあるまい。

何故なら彼女の着ている物は…瞳の色と同じ蒼のドレス姿だ。山道を走るのに向いているかと問われればはつきり真逆だといえる恰好である。

スカートから手を放せば裾に足を取られ、顔面から転倒してしまう未来が容易くイメージ出来る。

ついでに、彼女の長い水色の髪は背後で一本の三つ編みにされて髪飾りが付けられ、唇には紅がさしてある。

汗で折角の化粧が半ば崩れてしまっているのが残念だが、それでも未開の森の中よりは社交界の場のほうが似合う装いだろう…事実、彼女は数時間前までそう言う煌びやかな場所にいたのだ。

それなのに、数時間後には森の中を全力疾走しているという状況に、蒼の瞳には薄く光る物が滲んでいる。

「ああ、もう！！重い！大きい！目立つ！邪魔！」

ドレスに恨み言を言われる罪はない、むしろ哀れな被害者である。

着やすさや保温性、本来服に求められるはずの機能の全てを排し、着る者を飾り、美しく見せるために生み出された代物である。

本来、エスコート役の男性に手を引かれてゆつくり歩くか、あるいは優雅なダンスを踊る為のものであって、着た人間が森の中で障害物走をやらかすシチュエーションなど、最初から想定されていない。「恨むぞクレアー!!」

ここにいない、おそらくは女性の名を叫びながらも走るのをやめず、むしろさらに足を速めた。

そんな間にも、裾のレースが枝に引っかかり、華美なドレスが裂け、健康的な少女の生足が覗き、ここに男がいればどきりとして見入ってしまうだろう光景である。

疾走と共に官能的な装いへと現在進行形で変化していくドレスは、制作者である職人が見れば、血の涙を流すかもしれない。

「いつそ切り捨てるか?…いやいや、乙女としてそれは…」

邪魔なスカートを思い切って切り裂いてしまえば走り易くなるのはわかっている。

分かっているがしかし、森の中とはいえ本人曰く乙女のプライドとして野外露出など…命と天秤にかけられるものではないのだから…。

「フフフ…そうなったら、最低でも“追っ手”の皆殺しの必要が出てくるなあ…主に妾の精神の平和と安定の為に…」

表情に少々、壮絶な物が混じり始めた。

かれこれ結構な時間走っているの、意識が軽くハイになっているのだろう。

思考がうまく働かず、物騒な方向を向いているようだ。

そんな乙女として厳しい選択に迫られていた彼女の進行方向、脇の茂みがガサリと揺れた。

「追いついたぞ!!」

飛び出てきたのは男だ。

見るからにガラの悪い無精鬚の男…軽鎧を着ているが、一番目を

引くのはその手に持った肉厚の鉈だろう。

どう見ても山師や狩人のような堅気では無い。

「はっ相手が悪かったなお嬢ちゃん!!」

「……」

やはり、彼女を追いかけている連中の一人で間違いないようだ。

「この俺、俊足のリュ……」

「やかましいわ戯けが!!」

「おお!!」

調子に乗って名乗りを上げようとしたらしい男に、少女は足を止めるどころか更に加速して肉薄すると、やるせなさど奇立ちと理不尽に対する怒りなどをまとめて、八つ当たりで男に叩き込んだ。何故八つ当たりと断定できるのかと言えば、どう考えても剣で切るなり突くなりした方が簡単はずなのに、わざわざ柄を握った拳を男の頬に叩き込んだ事で明らかである。

女にも拳を使いたい時と場所と状況があるのだろう。

ともあれ、問題は柄を握った拳だ。

握り込んだその分の攻撃力は当然上がっており、彼女の滾る諸々の負の感情が上乘せされたそれは、男の頬を螺旋状にえぐり、体を駒のように1回転させた上で地面にたたきつけるという結果を出した。

「にがすかー!!」

「ぬな!？」

男を殴り倒し、その勢いのまま走り去ろうとした少女が足を止めた。

否、止めざるを得なかった。

地面に沈んだかと思われた男が、予想外のしぶとさでドレスの端を掴むことに成功したのだ。

同時にびりつと文字通り衣を裂く音が聞こえてきては止まらざるを得ない。

ただでさえダメージが限界に来ているドレスだ。

このまま走り出せばその結果等分かり切っている。

さつきまで自分で切り裂こうかと迷ってはいたが、それ以上に自分で脱ぐのと他人に脱がされるのでは山より高く、谷より深い差が存在する。

年頃の乙女として、他人に自分の服を脱がされるなど、伴侶以上の相手限定のイベントだ。

「こ、こらー！ー！明らかな三下やられキャラのくせに何を場違いな根性を出しておるか！？」

「や、やかましい！ここで抑え込めば特別手当……が……！」

「その根性をもっと別の方向に向けんかたわけ……！」

皆まで言わせず、少女の踏みつけが俊足の某の顔面に入った。

男の鼻からだらだと鼻血が流れるが、それでもドレスの裾を放そうとしない辺りの執念は見上げた物だ。

その理由が金と言うのがアレだが、金の魔力と言うのは侮りがたいものがあるのも真理だ。

倒錯的な格好をした美少女の素足で蹴りまくられ、鼻血を流している男の姿と言うのは第三者から見ればとんでもない光景なのだが、幸いと言うか不幸と言うかこの場に二人以外に人はいなかった。

おかげで誰かに見られるという事もなかったが、その分止めに入る人間もいないので二人だけでは止められない止まらないという感じだ。

「はーなーさーんーかー！ー！！」

「だーれーがーはーなーすーかー！！……ってあ」

「ん？」

蹴られまくっていた男が、何かに気づいて呆けた顔になった。

それに気がついた少女もなんだろうと動きを止める。

ここでやっと、客観的に状況を見る余裕を取り戻したのだが、同時に男の視線が自分……から少しずれた下の方を見ている事に気がついた。

そして少女の状態と言うのが男の顔めがけて足を振り下ろしてい

る状態であり、それはつまりスカートの中身が下から見えるということであり……………少女の蒼い瞳が別種の冷たさを宿す。

「え、えっと…」

「シ・ネ」

ドンと振り下ろされた足の下で殺人的な音が立ち、男が地面とキスする形で動かなくなった。

細かく痙攣を始めているので死んではいないらしいが…。

「…しぶといな、まだ息があるのか？」

「そのくらいにしていただけですか？」

「くっ」

このさいトドメまでさしておこうかと物騒な事を考えていた所に声が来た。

「…時間を食い過ぎたか…」

気がつけば、周囲をぐるっと囲まれている。

足元で寝ている男とおなじような連中が、目算で数十人……………本当に心外ではあるが、男のボーナスが確定してしまったらしい…足止めは成功だ。

「やはり…ドレスが…」

少女の本来の健脚なら、俊足の某すら振りきれて今頃身を隠していたかもしれないと思うとやるせない。

着ている物のハンデというのは予想外に大きかったようだ。

ここまで来ると、ドレスに文字通り足を引っ張る呪いでもかかっていないかと疑ってしまうが、まず間違いなく八つ当たりだと自分で分かっているので余計に鬱な気分になる。

「やっと追いつけました」

先ほどの声の主が、男達の輪から一步前に出てきた。

それを見て思考を切り替えたのが、彼女の表情から読み取れる。

男は間違いなくこの連中の代表だろう。

「アクア王国王女、リイン・アクア姫様とお見受けします」

「人違いだと言ったら信じるか？」

問いかけに対して少女：リインは不敵で返した。

姫と呼ばれた所からして王族なのだろうが、十数人の男たちに囲まれながら微塵も臆した所がない堂々とした姿は、確かに人の上に立つ者特有の空気を纏っている。

「御冗談を」。

礼儀のつもりか、男が苦笑する。

形だけとは言え、王族に対する礼を取る男を観察するリインは、特徴のない男だという感想を抱いた。

髪は長くもなく短くもない中間のくすんだ青、顔立ちはのっぺりとした面長：これと言って目を引くものがなく、印象に残りにくいというのがむしろ特徴といえる。

こんな場所ではなく、街中ですれ違っていたら気にも留めないだろう没個性：唯一気になるのが笑っているかのように細い目だ。：実際笑っているのかそれとも生来の目の形かは不明だが、そこに信愛を感じさせるものはない。

例えるならば、爬虫類的な温度を感じさせない瞳だ。

「名高き剣姫である貴女様を見間違えているとしたら、私はこの役立たずの目を抉り出すでしょう」

「フン、知っていて聞くな」

「これは失礼を」

頭を下げる男からは経緯の欠片も感じられなかった。

これまでの経緯を考えれば当然だろう。

経緯を抱いている相手を山狩りの如く追いまわしたりはすまい。

「そういえば近く【継承】を受けられるそうで、気が早いと思われるかもしれませんが謹んでお喜び申し上げます」

演劇じみた祝辞の言葉はむしろ挑発的で、実際にカチンとくる何かがあった。

勿論、それを表に出すのは自制する。

男の思い通りに反応してやるほうが癪だ。

「それで、お前達は何者だ？」

リインの目から見て…彼らはおそらく盗賊ではない。

鎧や武器に統一性はないが、集団で獲物^{リイン}を追い詰める統率された集団行動は訓練されたそれだ。

そうでなければ、いかにハンデがあつたとしてもリインが追い付かれる事はなかつただろう。

どこかの国の兵が…傭兵にしてもかなりの手練…そんな連中がたまに略奪目当てで襲つてきたと考えるよりも、目的があつて自分を狙つてきたと考える方がすつきりする。

実際、襲われる心当たりは無きにしも非ずだ。

「…さて、こんな無作法者を送り込んできたのはどこの誰だ？【フレイム】か？まさか【ウィンド】や【アース】とは言つまいな？それとも…」

「依頼主の事は守秘義務ですので」

食えない男だ。

完全に感情を制御しているのか、表情が欠片も動かなかつた。

「……フン、狸め」

「とはいえ、大人しく付いてきてくだされば貴女の疑問にも答が出ると思いますが？」

「断る！！」

即断だつた。

ついていったら何をされるか知れたものではないのだから当然だが、そもそも彼女は国の象徴といつても良い存在であり、何処の誰とも知れぬ輩にかどわかされていい人間ではないと、自他共に思う程度には重要人物だ。

「はい、そう思っていました」

男はリインの答えを予想していたのか、落胆の様子もなく細い眼を更に糸の様に細くした。

今度は確実に笑っている。

「その意気やよし！」

対するリインは腰に吊るしていた鞘に剣を戻した。

一見して降参の意思表示だが、周囲を囲む襲撃者たちは気を抜かない……むしろ緊張を高めている。

彼等は知っているのだ……リインには剣よりも更に警戒すべき”存在”が”憑いている”ことを……その様子に、リインがニヤリというベき笑みを浮かべた。

「来たれ、【水底の貴人】……！」
ウンディーネ

リインの言葉と同時に、薄く蒼い光を孕んだ力が風のように吹き荒れ、中心であるリインに向かって集まってくる。

「チェンジリング取替えっ子……！」

驚愕と畏怖、羨望と恐怖の籠ったそれは、誰の発した言葉だっただろうか？

「現れた……！」

「あれがアクアの【精霊】か……？」

竜巻の中心、そこに立つリインの背には今まで影も形もなかった物……細身の全身鎧に身を包み、中世の騎士のような姿のナニカが浮いていた。

蒼白い鱗を全体の基調に、流水の意匠が施され、女性のラインを持つ細身のシルエツト、兜の後ろから背後に二本の角が伸び、海中のように広がっている青の長髪が印象的だ。

何よりも目を引くのはその右手……騎士の右手は肘から先がリインの身長ほどもある突撃槍ランスになっていた。

左手はちゃんと五指になっているが、指先は爬虫類の爪のように鋭い。

その姿に……この世の物では無い神の造形に対して、周囲を囲む男達からは感嘆の溜息が洩れた。

「ウンディーネの雄姿をその眼に刻め……！」

襲撃者たちに見ている前で、リインが両手を掲げると、それに同調するように、ウンディーネが動き、両手を掲げた姿でリインに重なるようにして消える。

次の瞬間、リインの両手が青白く輝いて消滅し、消失した腕の代り

に蒼い粒子が両手の在った場所に集まって形をとる。

新たに現れたのはリインの両手ではなく、肘から先がランスとなった右腕、鋭く伸びた爪を持つ左腕…それは正しく、先ほど目にした青の騎士、ウンディーネの両手だった。

「さすが名高き戦姫、そのお年で両手を丸ごと取り替えられるとは」「人の年齢を持ち出すとは何処までも無礼な奴だな？」

「お褒めしているつもりなのですが、理解していただけないとはい…」目の前で起こった事を見ても、男にはなんら動じる所がなかった。この結果を予想していて、そのうえで”どうにかする”自信があるからこそのこの余裕なのだろう。

「しかし、その槍…こんな障害物の多い場所では、姫の全力を出せまずでしょうか？」

男は両手を広げてわざとらしく周囲を見回す。

周囲は原生林、其処ら中に木が生い茂っている。

そもそも、ランスとはある程度開けた場所での使用を想定した重量級武器であり、屋内やこの場所のように障害物の多いところでの取り回しには不向きな武器である。

男の部下達が既に、無言で木の幹や枝を盾にするように移動しているのを見れば、最初から…ここに追い込んだ時から地の利を利用するこの状況を狙っていたのは明らかだ。

「何よりここには山の中、“水辺”には遠い場所を選ばせていただきました。いかにウンディーネとはいえ、全力はだせますまい？」

「…何かと思えば…」

しかし、リインは笑った。

圧倒的に不利な状況のはずなのに、余裕の微笑を浮かべている。それを男がいぶかしむより早く、リインの立っていた地面が足の形に陥没し、彼女の姿がかき消える。

「な!？」

背後、斜め後ろでした破碎音に振り向けば、部下である男の胸を、ランスで盾にしていた木の幹ごと貫いているリインの姿があった。

ゴボリと部下の男の口から血の塊がこぼれる。

一瞬で絶命したのが誰の目にも明らかだ。

「…なめるな」

襲撃者たちは見る。

高速移動の反動で捲れたリインのドレスのスカートの下…彼女の足…そこにあつたのは少女のやわらかく柔軟な筋肉を秘めた脚ではない。

蒼白い脚甲に覆われた騎士の脚…ウンディーネの両足…リインは両手だけでなく、両足までまとめて取り替えていたのだ。

そしてやっと、彼女が何をしたかを理解する。

理解できた…と言っても、リインは特別な事を何もしなかったのだろう。

ただ跳ねるように動いて、右手の槍を突き出しただけ、その一連の動きがあまりにも早すぎて、視界から消えたように見えただけだ。ここまでくれば、リインを侮っていた事を認めざるを得ない。

まさか両手だけでなく、両足まで取替えるとは…そんな領域までいける人間はそう多くないが、リインが間違いなくそのうちの一人だと言う事を認めざる得追えなかった。

「まさかこれほどとは…」

襲撃者達も、リインにウンディーネが取り憑いていた事は事前情報で知っていたからこそ、その力が十全に発揮できない場所を態々狙って襲撃していたというのに…まさか、純粋な力だけで圧倒されるとは思ってもいなかったのだろう。

彼女の才能を過小評価していた代償に、味方の命一つ…これが高いと見るか、安いと見るかは難しいところだ。

「どうした？ 顔色が悪いぞ？」

「いえいえ、姫君のお心を乱すようなことではない瑣末事ですので」「ほう、そうか…ならば…」

周囲から自分を狙っている連中を見回してリインは槍を構える。胸を張り、“挑戦者達”を睥睨する姿は強者の風格を持っていた。

「かかって来い!!」
応えて、襲撃者達がラインに殺到する。

承

声が聞こえる。

遠くから…近くから…知らない誰かの声なのに、どこかで聞いた覚えのある誰かの声が…あるいは目の前の闇のすべてから……声が聞こえる。

形にならない声が聞こえる。

声は届いているのに、意味のある言葉に聞こえない。
理解できない音としか受け取れない。

それでも分かる。

この声の主は呼んでいる。

狂おしいほどに…渴望しているとわかる。

声が…遠く小さくなって行く…思わず手を伸ばし、近くに行こうとした所で…黒一色の世界に光が生まれた。

「……変な夢を見たな」

光を抜けた先に見えたのは、見慣れた自分の部屋の天井…その日、タイトの朝は奇妙な夢を見る事から始まった。

「……と言っわけです」

「……まゝり、タイト君は今朝変な夢を見たせいで遅刻した〜と？」

「はい」

呆れる担任教師、竜造寺高麗りゅうぞうじこうら：通称と言うか愛称コマちゃん…の反応に気まずい笑いを浮かべながら、タイトは内心で拙ったな〜と考えていた。

何と言うか、悪夢を見た時のような気だるさに負けたのがまずいけなかったと思う。

時計を見れば何時もより三十分早い目覚めだった事に、油断したのが失敗だった。

二度寝して一日の始まりをやりなおそうとか、そんな事を考えた結果がこれだ。

十分のつもりが一時間も寝過してしまうとは…あわてて制服に着替え、学ラン片手に全力疾走したものの、その程度で肉体の限界や物理法則の壁を突破出来れば誰も苦労などしない。

今の状況を言葉で言い表すならば、“タイト オン ステージ i n 教室”と言った所か？

クラスメート達の笑いと期待に満ちた熱い視線が、太陽炉の如くタイトに一点集中している。

元々の図太さに加えて開き直りのコンボを発動させているタイトでなければ、羞恥で溶けていたのではあるまいか？と言うレベルだ。他人の不幸と言うのは見ている分には楽しい…それは真理だろう。しかし、自分が当事者になってしまつては話が違ふ…出来ればタイトもそつち側でこの状況を笑つて見ていたかつたと思うのだが、完全に自業自得なので諦めるしかない。

「いいですか、タイト君？」

「う…は、はい」

説教が始まつた瞬間、タイトは思わずうめいて後ずさつた。

担任教師かつ年長者（実年齢は確か24歳）に対する態度として、不敬や不遜と言われても言い訳が出来ないが、その理由は一目瞭然……説教が始まつた瞬間、「ここにちゅうもく」とばかりに目の前に差し出された…服の上からでもそれと分かる二つのメロンの物

体に圧倒されたのだ。

「高校生なんですから、もっと自覚を持ってくれないと、起きられなかったなんて言い訳は社会では通用しないんですよ？」

「お、おっしゃる通りです」

竜造寺高麗と言う人物は、年齢にしては童顔で身長も低く、制服を着ていれば同級生で通るんじゃないかと言っくくらいに見た目が若い。

外国の血が混じっているらしい地毛のハニーブロンドをセミロングに伸ばし、サイズの大きな眼鏡をかけ、彼女特有の間延びした性格とそれに伴う口調が本人の印象を更に幼く錯覚させる。

「ちゃんと聞いてますか、タイトくく」

「勿論です」

そんな若く見られがちな彼女だが、唯一実年齢相当を通り越して明らかに平均以上だろな所、つと言つか部分が、今タイトの目の前に差し出されているスイカの親戚だ。

男であるタイトには、詳しいカップ数など分らないが、それでもアンバランスミスし過ぎじゃないのかと疑うデカさは、圧巻を通り越して威圧感まで発散してやがると来た。

更に性質が悪い事に、本人は自分の容姿に威厳が足りない事を自覚しているため、せめて生徒に説教する時くらいは大きく見せようという孔雀かハリセンボン理論で胸を張るので、自然とブツを見せつけて挑発するような格好になってしまう。

更に更に、物が物だけにやはり重いのか、胸の下で手を組んで支えているため、強調率が上がっている。

更に更に更に…実はコレ、孔明の罵的な物だったりもするのだ。

「お話はちゃくくんと聞きましょうーう！」

「ぬが！？」

ずんと言っ感じに、タイトの頭上に何かが落ちてきた。

頭頂部から入り、体の中心を突き抜けて波紋のように全身に広がる衝撃に、タイトの口から悲鳴が漏れる。

生理現象で漏れた涙でゆがむ視界の中、コマの右手を手刀の形に構えているのが見える…コマの罨が発動したのだろう。

罨と言っても要するに、コマの胸に気を取られていると話をちゃんと聞いていないと判断されて手刀が降ってくると言うただそれだけのことだ。

コマはいまどき珍しい体罰に躊躇しない教師である。

ついでに言えば、タイトが引つ掛かったのを見てクラスメート達から歓声が上がっている…なんて友達がいのない連中だろうか？

「もう、なんで皆真面目にお話を聞かないんですか？」

知らぬは本人ばかりなり、なので全員でお前のせいだと突っ込みを入れた。

口に出した瞬間、次の標的にロックオンされてしまう為、心の内だけに秘めて言葉にはしないが。

「はいはい、授業に戻りますよ？」

スイッチの切り替えのように、全員が授業中モードに復帰する。

パブロフの犬も真つ青の揃いようだ。

「タイト君も早く席についてくださーい」

「うう、はい」

基本的にコマはその場で怒るタイプなので、罰課題とかは出さないからなんとかその場をしのげばOKである。

まだダメージが抜け切れていないが、それでもタイトは自分の席に向かつて歩き出した。

あのチョップ…一見してふざけた軽いお仕置きだが、ふざけているのは正しく目だけであり、その威力は本物である。

一体どういう力の加え方をすれば再現できるのか知れないが、コマのそれは体の外ではなく、中にダメージが直接入ってくるのでこらえが効かないのだ。

知り合いが言うには、「それはひょっとして浸透系ジャナイカ？」
とのことだったが、それを確かめた事はない。

ただでさえコマの授業はあのチョップのおかげで恐怖政治じみた

ファシスト

所があるというのに、それに加えて実は拳法の達人だったなどと言うフラグが立つては、居眠りですら命がけになる。

そんな殺伐とした学校生活は御免だ。

ともあれ、物が物だけにコマの体罰が問題になったことは一度もない…あんなフザケタお仕置きもどきを見て体罰なんて思うやつはいない。

本人も体罰という意識があるのか…ないからこそ遠慮なく叩き込んできている気がしないわけでもないが、それを確かめる勇氣もまた無かった。

生徒の中にはあのブツを間近で見るために、コンボを食らう前提と覚悟でわざとお茶目をやらかす剛の者までいたりする…同士を見る視線をよこしつつ、こっそり親指を立てて見せて来ている連中がそれだ。

タイトも応じて拳の親指を立てると半回転ジヨクニオチロさせた。

「よう、三年寝太郎」

自分の席に着いたタイトに声をかけたのは、前の席から体をひねって後ろを振り向いているツンツン髪の立った釣り目気味のちょい悪風クラスメート、獅子王夜鳥ししおやとりだ。

「お仲間に対してちよつと冷たいんでね？」

「いや、夜鳥お前…その所はきつちり否定して置くぞ」

確かにタイトも男だ。

異性に興味がないとか、実は男の方がいいとは言わないが、だからと言ってそこまでがつついた欲望丸出しな人間ではもない。

無論、Mっ気全開な気質は持ち合わせてないし、そういう人間に見られるのも御免こうむる。

「あれはいくらなんでも反則だろうが、あんな風にあるだけで自己主張しているような代物を完全無視するのは相当な精神力が必要にだぞ、女子でも時々引つかかるやつがいるつてのに」

「それならなんで言い訳しなかったんだ？タイトって嘘が嫌いとかそついうキャラだったっけ？」

確かに、遅刻の言い訳はいくらでもあったが…。

「…嘘には使用制限があるんだよ」

それがどんなつまらないことであっても、重要な事であっても嘘は嘘だ。

そしてつまらない嘘ほど簡単になれる。

嘘とはその大小に関わらず、つけばつくほどに代償として信頼が消費されてゆく代物だ。

「狼少年？」

「イエス、嘘はここぞと言う時に、本当に隠したい事にだけ使うものだ…と思っている」

「真理だね」

「ん…まだ何か騒がしいですね…今度は夜鳥君ですか？」

竜造寺が二人の会話に気がついたらしい。

その眼は既に夜鳥をロックオンしている。

全員が新たな犠牲者に出現に第二ラウンド開始かとざわつくが…。

「いや、先生の授業って分かりやすいよね」と言う話をしていたところだ

別の意味で教室の空気がザワリと動いた。

「あ、あら？」

「竜造寺先生、授業を進めてもらえませんか？俺、毎日先生の授業をととても楽しみにしてるんです！！」

「そ、そこまで言われては先生も頑張らないとダメですね…でもあんまり私語をしちゃダメですよ」

「はい…いけませんでした」

実にあっさりと、夜鳥は回避不能のはずのトラップを回避した。

しかもコマを上機嫌にして…教室にいるコマ以外の全員が、その手際に唖然としている空気が伝わってくる。

「ふっ、ちよろいよコマちゃん」

「夜鳥…俺、お前は一回刺された方がいいと思う」

成績はなかなか、話術も上手く、顔もそこそこで見ての通り機転も効くクラスのお調子者のな男だが、割と長く付き合っているタイトにはこの男がその才能を真つ当な方向に使う将来と言うのがイメージ出来ない。

逆に、詐欺師になった夜鳥のイメージは実にあつさり浮かんてくるのだ。しかも結婚詐欺師的な何かに。獅子王夜鳥とは、つまるところそういう男なのだが。不思議とタイトとはウマが合うのは何故だろうとタイト本人も思う。

閑話休題、これ以上やり過ぎると授業妨害になるので夜鳥も黙り、授業が本格的に再開されると授業中特有の静寂が戻ってきた。

「ここで重要なのは」

教科書を読みあげるコマの声と板書するチョークの音、後はノートを取る生徒達が立てる小さな音だけが驚くほど大きく聞こえる。

間延びした声が朝から眠気を誘うが、その辺りは皆、根性で我慢しているようだ。

「変な夢だったな」

落ち着いたタイトは、少しだけ今朝の夢の事を思い出していた。

内容はどうしようもなくシンプルでわけが分からない。なのに何故か妙に心に引っかかる夢だった。肝心の何が引っ掛かっているのかはタイト自身にも分からないのだが。

「ま、いいか」

少しだけ考えてから、タイトは考えるのをやめた。

もともとあまり物を深く考える方ではないし、所詮は夢だ。

精神科医の先生でもいれば、一般人が知らないような専門用語付きで解説してくれるかもしれないが、そこまでする必要性も感じない。

「それよりも今は目の前の事だよな」

「はい、みなさん。ここもテストに出しますよ」

黒板を見れば、褒められてテンションが上がりまくっているコマが、ここぞとばかりにテストの要点を列挙しまくっている。

これを逃したらテストの点数と内心書のダブルで響くだろう。
思わず嫌な汗を感じる大盤振る舞いだ。

「最終的に勝つのはウサギじゃなくて亀なんだよな…」
とりあえず亀になるため、授業に集中しようとして…。

「…え？」

集中できなかった。

驚きで思わず、タイトの腰が椅子から浮く。

静かな教室にはそんな声と音でも思ったより大きく響き、再び注
目が集まってくる。

「どうしましたタイト君？もう一回いつときですか？」

「い、いいえ結構です！！行つとくと言うか逝っちゃいますから！
！」

主語がないから言い回しが微妙にエロい。

タイト自身慌てている為にわけのわからない事を口走っている。
それでも、混乱する頭で必死に考えてとっさに必要な時にしか使わ
ない事になっているはずの“嘘”をつい誤魔化した。

「ふん、そうですか？」

「は、はい。何でもありません」

どこからどうみても、明らかに挙動不審なタイトだが、とりあえ
ず騒いで授業妨害する気はないらしいと判断したコマは黒板に向き
直り、板書の残りを書き込んでゆく…いささかあっさりしている気
もするが、今はそれに構っている余裕がタイトにはない。

「な、何だ？」

タイトは自分の心臓が驚くほどの速さで鼓動を売っているのを自
覚した。

確かに今…タイトは誰かの声が聞いた。

聞き間違いでなければ、夢の中で聞いたあの声だ。

「皆…聞こえなかったのか？」

周りを見回すが、他のクラスメート達は声に反応した様子はない。

彼等が反応したのはタイトの拳動不審に対して…聞こえていなかったのだろうか？

「…マジで？」

もし、さっきの声が、タイトにしか聞こえなかったとすれば、民主主義の法則にのっとって、間違っているのは少数派のタイトという事になる。

「空耳…だよな？」

できればそうであってほしい。

妙な夢を見るまでならともかく、聞こえないはずの声を聞いてしまつと言つのは冷静に考えて色々やばいと思う。

冗談でも何でもなく、精神科の先生の御厄介になる話だ。

「え？」

また…声が聞こえた。

しかも自分の後ろから…タイトの座っている席は、列の一番後ろ…そのさらに後ろに誰かがいるわけなど…あり得ない無い。

あり得ない無いはずだ。

しかし、そんな理屈を考えるより早く、タイトの体は動いていた。とつさに背後を振り返った…振り返ってしまった瞬間、タイトの平穩は終わりを告げた。

「……というわけでこうなるのでーす。分かりましたか？」

いつの間にか…生徒の数が一人減ってしまった事にだれも気付かないままに、淡々と授業は進んでゆく、彼等がその異常に気がつくのは少し先の未来の話……古来より、そこにいたはずの誰かがいつの間にか消えてしまう現象を指して、“神隠し”という言葉が存在している。

「ぐおー!!」

森のなかと言う戦場での戦いは続いていた。

焦げ茶色の髪と目をした男が枝をへし折りながらはじき飛ばされてきて地面をバウンドする。

「悠長に寝ている暇など与えん!!」

「く、くそ!」

怒声と共に立ち上がった男が、構えた所に追撃が来た。

ほぼ一足飛びの勢いで男に飛びかかって行く姿と速度は人の物では無い。

異形の四肢とその身を取り換えたリインだ。

「ち、ちくしょーが!!」

自分にとびかかってくるリインに対し、男が先に動いた。

不可視の力が男から放たれ、目の前の地面へと注ぎ込まれる。

その結果は、地面が盛り上がり、現れたのは厚みのある石壁として現われた。

「フン、魔法使いが混じっているのか? 中々良い駒をそろえているようだ…」

正面から激突するルートにありながら、リインは避けるそぶりすらない。

むしろ地面を砕く勢いで一步を踏みこみ、加速する。

「げふ!!」

右手のランスで文字通り壁となった石を砕き、その先の男の胸を鎧ごと貫いて心臓を破壊、即死させる。

「甘い!!」

息をつく暇もなく左手で背後を裏拳で薙ぐと、死角から放たれた投げナイフが二本、弾かれて宙を舞う。

休む暇など与えないとばかりに來た拳大の火球と風の刃に対しては最初に刺し殺した男の死体を、槍に指したまま盾として使って防ぐ。

既に文字通りの死体からは悲鳴すら上がらないが、切られた傷からまだ温度を持ったままの血がしぶき、炎にあぶられたタンパク質

が焼ける嫌な匂いが発される。

「この程度で妾を暗殺する心算だったとは、馬鹿にしているぞ!？」
リンは気にはしない。

少なくとも、この場においては自分の命より重要な事では無いと割り切る。

ランスを振り払って、無残な事になった死体を固まっている集団に投げ込み、囲みが乱れた所を一足飛びに距離を詰めて加撃する。
一連の動作はどれも無駄がなく、計算された戦術眼の元に立てられた…まるで舞のようだ。

その優雅さとは真逆に、彼女が左右の腕を振るうたび、その足でけりを放つたびに、確実に襲撃者は数を減らしてゆく…一人の少女が大人の男、しかも完全武装した十数人を相手取って優勢に立っている姿は御伽話じみているが、男達にとっては残念な事に…その眼に映る全てが現実だ。

「死にたくなければ背を向けよ！生憎と逃げる者を追うほどの余裕はない!!」

半数に減ったとは言え、いまだ10数人は残っている。

それを前にして慈悲をかけることが出来るのは、ひとえに彼女の持つ力が襲撃者達を圧倒するに足るものであるからこそだ。

「ふむ、これはまずいですね…さすがと言っべきなのでしょうが、人間心理を知っていらっしゃる」

戦況を見ていたリーダーの男が呟き、同時に理解もしていた。

これは戦術だと…取り換えを行ったチェンジリングは確かに強力だが、それでも付け入る隙がないわけではない…“絶対の存在ではない”のだ。

そもそも、無敵の武力をもっていれば、最初の時点で逃げる必要もなかったはずであり、そして男はチェンジリングの“弱点”を知っている。

数をそろえたのはそのためだ。

大分数を減らされたとはいえ、残った人数で一度に攻撃をかければ

その弱点を突く事も不可能ではない。

ただしその為には、自分の命を顧みない覚悟が必要になるだろう。この場合半数以上…三分の二は打ち取られるのを覚悟しなければならないのだが、リインもそれに気が付いているが故に、連中に逃げ道を与える事で窮鼠にしないようにしているのだ。

案の定、生き残れるかもしれないという可能性に、襲撃者達は動揺していた。

死にたくないというのは人間と言うより、おおよそ全ての生き物の本能であり、誰だって死ぬ側より生き残る側に入りたいものだ。そういった迷いは、生死の狭間で決定的に作用する。

「ど、どうすんだよ？こんなに強えなんて聞いてないぞ？」

リーダーの一番近くにいた男が伺いを立ててきた。

そんな問いが出る時点でリインの策略に囚われている証拠…問われた男が深い吐息を吐いて前に出る。

「止むを得ませんね、使う気はなかったんですが…これも私の見通しの甘さと受け入れましょう」

肩をすくめ、男は力を抜いて自然体になる。

「【長腕のネリー】」

リインの時と同じ、力の流れが男を中心に発生した。

それに気づかない者がいる訳がなく、全員の視線が集まる場所で現れたのは群蒼色の異形の騎士、全身を覆う鱗状の装甲に、蛇を思わせる兜、そして何より目を引くのはその両腕だ。

人体のパースを間違えたのではないかと思うほどに長く、手甲にはこれまた蛇の意匠、蛇の牙を思わせる鋭い五指の先端が足の甲の直ぐ隣にある。

長腕のネリーと呼ばれた“妖精”が男の体の中に消え、起こる変化は男の両手だ。まともな人間の両手が歪な物と取り替えられる。

「ほう、お前もチェンジングだったとはな、長腕のネリーか…」

「姫のような才能がなく、お恥ずかしい限りです」
才能がないというのは本当なのだろう。

取り換えられた両腕の内、右手は完全に取り替えられているが、左手は二の腕の半分くらいまでしか取り替えられておらず、後は生身のままで。

チェンジリングの取り換えには才能や努力による個人差があり、それは取り換える事の出来る体の面積に如実に現れる。

力をセーブしてどうにかなる相手などとなめているわけでもあるまい。

左右で腕の長さが違ってしている姿が、そのままこの男の同町立の限界と考えて間違いないだろう。

「今更ですが、キクールと申します」

「キクール？それは本名か？」

「もちろん偽名です。ちなみに昨日の寝酒から取りました」

「何所までも人を食った性質の悪い道化だな？」

「では、一手お手合わせ願います」

言うや否や、キクールが貫き手に構えた右手を突き出す。

彼我の距離は20メートルほど、とてもじゃないが攻撃の届く距離ではない…筈だったけど…。

「くっ！！」

咄嗟に、リインは右手のランスを構えた。甲高い音が響き、振動が右手を通じて全身に流れてくる。

ランスと金属音を出して弾かれた”それ”は射線をずらされ、背後にあった木の幹を削り取った。

「ちっ追撃か！？」

リインが飛びのいた地面に次弾が突き刺さる。

「さすが戦姫、勘がいい」

「心にもないことを口にするな！！」

弾いた初撃、そして今地面に突き刺さっている物は飛び道具の類ではなかった。

その正体は…腕だ。

キキュールの腕が、彼我の距離をゼロにするほどに伸びている。

元から長腕のネリーの腕は長かったが、20メートルもの長さはないかったはず…つまり、これは錯覚でもなんでもなく、単純に物理的な腕の長さが伸びたのだ。

「それが長腕のネリー的能力か!？」

長腕のネリー…湖や川など水辺に潜み、その腕を伸ばして子供を水の中に引きずり込むとされている妖精だ。

しかも、どうやらあの腕には関節が存在しないらしく、意匠にある蛇のように、両手がリインを威嚇するかのごとく動いている。

「こんな物ではありませんよ？」

饒舌に、そして得意げに語りながら、キュールは更に腕を振るう。今度は突き出す動きではなく、振り回す動きだ。

「厄介な…!己の妖精の能力を知り尽くしているのか!？」

振るわれる長腕のネリーの腕は鞭のようにしなりながら襲い掛かって来た。

爪が空気を打つ音がする。

達人の振るう鞭の先端は音速を越えるといわれているが、それと同じことが起こっているらしい。

あの先端に打たれれば、それだけで皮膚が裂け、骨が碎かれるだろう。

「くっ!！」

当然、そんな物を食らうのはごめんなリインは襲い掛かってくる蛇の鞭を避け、それが出来ない物に関してはランスで打ち払う。

リインの間合いは完全に長腕のネリーの攻撃範囲に食われていた。この距離はウンディーネのそれではない…せめて近くに“川”であれば出来る事はある”のだが、キュールも言っていたように近くに水はない。

「それを狙ってこの場に誘導してきたのだから当然か…この上は…」方法はある。

本人曰く、才能の足りないキュールは両手を取り替えるのが精一杯で、接近戦に持ち込めればリインの基本性能で圧倒できるだろう。

…現に、両足まで取り替えているリインには出来る、脚力に物言わせた高速移動はキュールには出来ていない。
多少の傷を負う事を覚悟の上で、距離を詰めて一撃で決めれば勝機はある。

「…気配が変わりましたね？」

リインの覚悟を、キュールは見抜いていた。

元より、彼女が出来る事は特攻か逃げの一手だ。

向かってきてくれるならともかく、逃げに回られると面倒な事になると考えていたので、リインの選択はむしろ望む所だった。

「とはいえ…どうした物ですかね？」

キュールは、ウンディーネの突破力を舐めていない、むしろ尤も警戒している。

そして接近戦になったら分が悪い事も理解している。

能力的に、長腕のネリーは近距離よりも中・長距離においてその真価を発揮する。つまり、リインが目の前に来る前にどうにかしなくてはならないのだが…。

「…フム」

周囲を見回していたキュールは、周りを囲んでいた男達が距離を取ろうとしている事に気がついた。

それも当然だろう。

妖精や精霊の持つ力同士が真正面からぶつかれば、巻き込まれただけでただの人間では死にかねない。

キュールに後を任せて離れようとするのは当然の思考だ。

「フム、この手で行きましょうか…」

何かを思いついたキュールは伸ばしていた左手を戻し、比較的近くにいた一人の首根っこを掴んで引き寄せる。

「う、あ！！」

いきなり引つ張り戻された男は目を白黒させているが、キュールはそんな事を気にしない。

元から細かった目をさらに細くして男の顔を覗き込む。

「何処に行くつもりです？」

「え、ええ？」

捕らわれた男が首をかしげる。

何故そんな事を聞かれなければならないのかと言う風だ。

「給料分の働きはしてくださいよ」

「そ、そんな事言われても…お、俺達はチェンジリングじゃねーんですよ？これ以上出来ることはありませんや！…」

「ありますよ」

「え？な！？」

そこからは問答無用だった。

キュールはチェンジリングの膂力に物を言わせて、男を投げ飛ばしたのだ。

特攻の姿勢で硬直したリインがいる場所目がけて…。

「ちょ、お主何を！？」

リインは完全に出鼻をくじかれた。

キュールは自分の部下を、リインに投げつけて来たのだ。

いきなりの凶行と、飛んでくる鎧付きの男、特攻のタイミングを潰された驚きで、咄嗟に避けるか打ち払うかでリインの思考が止まった。

「ゲブー！！」

「な！？」

男の体を鎧ごと突き抜け、鋭い先端を持つ何か飛び出してきた。男の体から飛び出してきたそれは、一直線にリインの心臓を目がけて突き進んでくる…男の体を目隠しに放たれたため、回避するた

めのタイミングは既に失している。

「こ、つのー！」

それでも生存本能がリインの体を動かし、身を仰け反らせ、ウンディーネの四肢を使って命を繋ごうと動いた。

「ぐー！」

命が助かったという意味では幸運だっただろう。

脇腹の一部を挟るように持っていかれたのは不幸だっただろう。

独楽のように回るリインの体から、返り血でないリイン本人の血が円を描くように撒き散らされ、小柄な少女の体がドサリと重い音とともに地面に叩きつけられた。

「う……ぐ……何がー！」

意地で悲鳴を飲み込み、片膝をついて立ち上がるが、挟まれた脇腹からはかなりの勢いで血が流れ、急速に目の前の地面に赤い血が染みこんで行く。

「おや、仕留めそこないましたか？」

長く伸ばした左腕を戻しながら、相変わらず細い目でキュールが笑う。

人間一人の体を貫いて襲ってきたのは、やはり長腕のネリーの腕だった。

「しかし、おかげで取替えは解けてしまったようですね？」

リインは歯を食いしばる。

その四肢はウンディーネの物ではなく、彼女本来の彼女の物だ。

脇腹に受けた傷は、常人なら十分に致命傷である。

それでも生きているのはリインに宿っているウンディーネが、持つる力で宿主の命を繋いでいるからに他ならない。

そのため、今のウンディーネにはチェンジリングに割ける力がなく、取り換えが解けてしまったのだ。

「おや、何ですかその眼は？卑怯と罵りますか、望む所ですよ？」

「そういう……問題では……ないー！」

戦場において、不意打ちが汚いなどという気はリインにはない。

自分が死なないために、勝つ為に成しうる全てを持ってあたる姿勢は戦士としてはむしろ正しい。

生き残ったものにしか正義を語る事は出来なく、生き残れなければ悪と呼ばれても文句は言えない…結局殺し合いというものは最終的にはそこに至る。

故に、戦場に出た以上、不意打ちに倒れたとしてもそれは己の未熟さゆえだとリインは覚悟をしていたが…目の前の男は違う。

こいつは決して許されない事をした。

「貴様…部下を…」

目の前にいる外道は…自分の味方のはずの人間を一人犠牲にした…リインの不意を突く為だけにだ。

彼等の関係がどんな物だったかはこの際関係ない。

たとえ上下の関係があつたとしても、笑顔で仲間を手にかける行為には嫌悪しか感じない。

「ええ、これ以上の被害を出さないために、尊い犠牲になつてもらいました」

キュールの言葉に、他の襲撃者連中が揃って青くなる。

犠牲になつた男は、たまたま近くにいただけだ。

それ以上の意味も以下の理由もない…つまり、リインの目をくらます事ができれば死ぬのは誰でも良かった…そう言う事だ。

「この下種が…邪妖精が好むわけだ…」

「一国の姫ともあるう方が、そんな差別的な物言いを…はしたなくはありませんか？」

妖精は人間を選んで憑くと言われている。

その人間の性格とフィーリングがあつたのだとか、容姿が気に入つたのだとか言われるが、幾つかの例外を除いてその理由と法則性を証明したものはいない。

そして、憑いた妖精を見てマスターである人間の性格や行動を悪し様に罵るのは忌避される行為だ。

「貴様に関しては問題あるまい！？真実なのだからな！！」

怒りの視線で睨みつけてくるリインに、キュールがゆっくりと近づいている。

いきなり彼女の身柄を確保しようとしなのは、最後の力での反撃を計算しているのだろう。

現に、腰のロングソードを再び抜いてキュールを睨んでいる今のリインの状態は、まさしく窮鼠と呼ぶにふさわしい。

「出来ればここで観念していただけると…」

「するわけがあるまい!!」

細い目の先で、サディスティックな笑みを浮かべるキュールに、リインは嫌悪しか感じなかった。

リインは意地でその薄ら笑いを止めてやると立ち上がるうとして…。

「あ…」

しかしそれは出来ず、それどころか膝から力が抜けて腰砕けになる。

視界がゆがみ、頭痛がするこれは…。

「毒か!?!」

迂闊だったと言うしかない…長腕のネリーの意匠を見た時点で、その可能性に思い至るべきだったと齒?みする。

「仕方ありません、多少”軽く”なってもらうしかありませんね…」

長腕のネリーの腕が再び伸びる。狙いは膝をついているリインの足…人体を貫通する威力を考えれば、足が骨ごと断たれて千切れ飛ぶイメージが簡単に出来上がる。

キュールの言葉が正しければ、殺す気はないらしいが、激痛は常人と同じく感じるし、足が断ち切られるのを見て正気でいられる自信はない…こいつらにとっては死んでいなければ何でもいいのだから…。

「…何につ?」

「え?」

傷みが来るより先に聞こえた声と何かを殴打する音に、思わずリ

インは目を開けた。

そこにキュールの姿はない。

あるのは自分に背を向ける黒い……“誰か”の背中だった。

承（後書き）

加筆修正で追加したキャラ。

竜造寺高麗^{りゅうぞうじこうら}

担任、間延びした声とミニマムな体躯で女学生と間違われやすいが、無意識にか意識的にか中国拳法の奥義みたいな事が出来る。

名前の由来は九州は佐賀（鍋島）の猫騷動、コマって変換したら高麗で引っ掛かった。

獅子王夜鳥^{ししおうやどり}

頭がいいが、何故かそれをまともな所に使うのが想像できない奴、しかも何故か主人公の友人。

名前の由来は夜鳥を縮めて書くと鵠となる。

平家物語とかに出てくるキメラっぽい生き物、正体不明な事から「鵠的人物」とか言う言葉があり、掴みどころがないと言う意味。

獅子王は平家物語で源某が鵠を打ち取ってその褒美に貰った刀の名前。

転

声に振り返ったら…コスプレした殺人鬼がいた。

初対面の相手を見て、いきなり殺人鬼と思うのは最低最悪の第一印象だと思うが、なにやら鎧のようなものを着て、物騒な刃物付きの手甲をつけている人間をストリートに表現したら…やっぱりコスプレした殺人鬼という言葉しか出てこないだろう。

ご丁寧にも、手甲の鋭い爪にはまだ乾いていない血みたいな赤い物がついていると来ている。

何でこんなあやしいを通り越して危ない格好の奴が教室に侵入してきたのに誰も気がつかなかったのだろうか…コマ先生を初め何で皆騒がないだろうかとかいろいろあるがしかし、タイトにはそこまで冷静に相手を観察するだけの余裕はなかった。

理由は単純に、男がその物騒な凶器をまさに振り下ろそうとしていたからだ。

その瞬間のタイトの思考は、“死”と言うとてもシンプルな一字に埋め尽くされていたため…。

「何つつが!？」

「…あれ？」

タイトは、自分の拳に感じた衝撃に驚きの声を漏らした。

見れば、腕を振り下ろそうとしている殺人鬼さんにカウンターを叩き込んでいる自分がいる…感触からして、男の鼻骨はへし折れているだろう。

「おやゝ?」

「ぐあ!!」

しかも連続で反対の手に衝撃が来た。

男がひるんだ所に、ワン・ツーでさらに一発入たらしい…自分で殴ったはずなのに“らしい”と言うのは、やはりタイトが殴ろうと考えて行った行動ではないからだ…多分ではあるが、生存本能とか

そう言う類の物が、思考より早く、反射的に体を動かしているのだらう。

誰だって死にたくない。

それは人間に限らず生物なら当然持っているはずの本能：要するに、殺されるかもしれないという恐怖と死と言う未来予想図に直面した事で、生存本能が過剰に反応し、タイトの意思を無視して自分を殺すかもしれない男：目の前で盛大に鼻血を垂れ流している男にカウンターを叩き込んだのだらう。

タイト自身、自殺志願者と言うわけでもないし、事情すら良く分からないが、その反応はこの場では多分正しい：気がする。

「ち、調子に：がっ！！」

何やら男が反撃に出ようと言う雰囲気だったので、最後だけはタイト自身の意志で先手を取ると顎を横から水平に打ち抜いた。

脳を揺らされた男が膝をつくことで、やっと少し冷静さが戻ってくる。

「えっと…」

しかし、周囲を見回した瞬間に、タイトの思考は再びフリーズした。

見慣れた教室は何処にも無く、代わりにあるのは目に優しい緑黄色の森林と、むせるような植物の匂い：withコスプレして剣を構えているむさ苦しい男達と来た：思考の一つや二つ、簡単に止まるレベルのギャップだ。

「お、お主一体…」

「え？」

背後からの声に、思わず振り返れば：お姫さまがいた。

蒼いお姫さまが、地面にぺたんと女の子座りをしている。

タイトより少し年下に見える少女は、どうやら怪我をしているらしく、脇腹のドレスに赤い物が滲んでいた。

座ったままぽかんとタイトを見上げているのはそれが理由だろうか？

「…フム」

タイトが周囲を見回すと、男達が身をすくめる。どうもいきなり現われたタイトを警戒しているらしい…連中を一通り見て、再び彼女に視線を落とす。

タイトの黒い瞳と彼女の蒼い瞳が交差した。

しばらくそのまま、時がとまったかのように互いを見つめあふ。

誰もが介入のタイミングを失っていた。

「立てる？」

「あ、ああ…」

タイトが差し出した手に手を添えて、少女が立ちあがる。

「え…つと、なあ？」

「何だ？」

「逃げるぞ…！」

「え、ち、ちよつと待てお主！なあー！？」

反論があつたようだが問答無用、腰に手を回して抱え上げると一目散に駆けだした。

どうせなら悲鳴も可愛いかな色っぽいものを上げると心で突っ込みつつ、それは男の勝手な理想の押し付けかなともちよつと考えながら、少女を抱えたまま脇目も振らずに囲いを抜け出して全力で駆ける。

周りにいた男達は、終わったと思っていた所に何処からともなくタイトが現れ、あまつさえ上役がカウンセラー^{キョール}を食らって目を回しているという驚きの連続でとつさに動けない。

いきなり逃げ出すなど予想外でもあつたのだらう。

その迷いが隙になり、タイト達に味方した。

「一体、何なのだお主は！？」

知らないとはいえ、王女であるところのリンをお姫様抱っこし

ながら、タイトは走る。走って走って走る。

抱えているリインの言葉など無視して、とにかく両足を動かすことしか考えていないように見える。文字通りの意味で話になりそうになかった。

「お、おいちよつと待て、このあたりで良いだろう？降ろせ！！」

「ダメ！今止まるともう走れない！！それに死にたくないから！！」
堂々と情けないことを言ったタイトに、リインが呆れた。ランナ―ズハイになっているようだから、本音が駄々漏れなのだろう。

舗装されていない山道で、一人を抱えているという悪条件まで重なっていながらこけないのは奇跡に近い。ナイス生存本能、人間というのは本当に侮れない生き物だ。

ただし、それはそれでこれはこれ、危険性が理解できる点で出来ないよりむしろ、それにも限度があるだろう。

しかもリインはいまだにロングソードを抜き身のままで持っているので、いつ転んで刃が自分達を指してしまわないかと物騒で仕方がない。

「埒が明かな」

やむを得ないとリインは溜息をついた。

「正氣に戻れ、軟弱者！！」

「おう！！」

リインの小さな拳がストレートにタイトの頬を螺旋状に抉った。両手で抱えられた状態のくせに、腰の入ったいいパンチだ。

Q、人一人お姫様抱っこして全力疾走している状態でそんなモン食らったらどうなりますか？

A、吹っ飛ぶに決まっているだろう。馬鹿ですか？

そのまま二人は別々の方向に飛んだ。

タイトの体が錐揉み回転して放物線を描き、生々しい音と共に地面を削ってから止まる。

「フン、ぬわああ!!」

こっちはラインの悲鳴だ。

彼女は放り出されたにもかかわらず、宙で身を捻って優雅に着地したは良いものの、そのまま衝撃が傷に響いて悶絶した。自分が怪我人だという事を忘れていたのか？

しばしそれぞれのダメージに呻いていた二人だが、復活したのはほぼ同時だった。

涙目な所は二人とも、それぞれ殴られた頬と脇腹を押さえ、ついでにラインは抜き身のロングソードを杖のように持っている。

「なにすんだこら!!? 犯すぞ!!」

「お主何者だ!!? 握りつぶされたくなければ答えよ!!」

ぱつと同時に相手から距離を取った。こいつら本当に怪我人だろうか。タイトは微妙に内股になり、ラインは手で胸を隠すように半身になる。

二人とも顔が赤く、色々想像してしまったらしいが。これが若さか？

「ま、まて。まずは落ち着こう」

「そ、そうだな、まずは落ち着くのが大事だな」

とりあえず、話をしないと何も解決しないだろうという所で意見は一致している。

二人とも、急展開過ぎて少し落ち着かなければやってられない。

そして冷静になってみれば。なんか色々とアレだった。

突っ込みどころ満載だった。

人気がない森の中、まずこの時点でおかしい。

タイトは間違いなく学校の教室にいた。

それが背後を振り返った次の瞬間には森の中である。

ついでに全力ダッシュで息を荒げているタイトと、着ているドレスが色々無残で、あっちこっち裂けて一見襲われ。いや、犯人はタイトでは無いが実際に男達に襲われた後の状況でしかも剣を構えている少女。どうみても男として言い逃れできない状況で、自分でも

これを見たら通報するだろうと思うと軽く鬱になる。

「えっと、俺の名前はタイト……」

「タイト？珍しい名だな？妾の名はリイン・アクア。名前からも分かる通り、アクア国の王女だ。危ない所を助けてもらって感謝する」

「……王女？」

「……いかにも」

いきなり自己紹介から滑ったようだ。

タイトはいきなり王女と言われてはいそうですかと納得できるほどファンタジーな頭はしていない。

たとえ理解不能なファンタジー状況のど真ん中に放り込まれたとしてもだ。

確かにリインは美人だし、着ているものもかなりボロボロではあるがドレスのようだ。アフターでこの状態なら、ビフォーはかなりものだろうと思う。

確かにそう言う目で見れば王女に……見えなくてもないか？

「どうかしたか？」

気がつけば、リインがなんか文句でもあるのか、ん？という感じの良い笑顔になっている。

どうやら表情から何か読み取ったらしいが、ひょっとして本人も気にしているのだろうか？

「……俺の王女さまのイメージには自分を抱えて走っている人間に、容赦なくいい感じの拳を叩き込む武闘派の要素や、それによって自爆するうっかりさんの要素はないんだけど？」

「う……」

抜き身のままの剣が怖いが、言いたい事は言わせてもらおう。

女の子が王子さまに理想を抱くように、男の子だってお姫さまに抱く理想と言うのがあるだろう。

それを踏まえてリインを見た時、疑問を感じるなど言う方が無茶では無いか？

「しかもいきなり剣を振り回すなんて、王女って言うよりむしろバ

「サーカーじゃね？」

「し、失礼な、妾の精霊はウンディーネであってバーサーカーではないぞ？」

「…何？」

「…今、何か重大なズレがあつたような気がする。」

「だ、大体！お主こそ何者だ！？一体何処から現れた！？」

「え？」

「旅人か？少なくともアクアの人間ではないのだろう？そんな黒い髪に黒の目と、見たことのない黒い服まで、ここまで徹底して黒い人間など初めて見るぞ？」

羞恥のラインが話をぶつた切つて変な方向に話を持って行つたため、タイトの疑問は質問になる前に霧散した。

「……」

「どうした？何か言いづらい事でもあるのか？」

「いや…言いづらい事がどうかさえ分からないって言うか…」

「何？」

タイトの返答でラインがいぶかしげな顔になるが、これは仕方がない。

いきなり見ず知らずの森の中に放り出されて、しかも修羅場のど真ん中、成り行きで助けたのがお姫様？何が起つたのか、何故いきなりこんな場所にいいのか、一番聞きたいのはタイト本人だ。

ラインの質問に答えられないのも道理である。

「俺にも何が何だか、わけが分からないとしか言えない。そつちこそ何でいきなり襲われていたわけ？」

「……」

「えっと、ひょっとしてそれって聞かない方がいい事？」

事情を聞こうとしたら沈黙が返つて来た。

その無言の意味を察せないほど鈍くはないつもりだ。

「そつ…だな、おそらくこれは…」

案の定、ラインがつらそうな顔になった。

その理由までは初対面のタイトには知り得ないが、それでもリインが悩んでいるのは分かる。

原因に心当たりはあるっぽいけど、だからこそ口に出れないのかもしない。

「これは、アクア国の問題だ」

「アクア？　そう言えばアクアってなに？」

確かリインは自分の事をアクアの王女とか言っていた。

嘘か本当かは知らないが、しかしタイトにはアクアという国に聞き覚えはない。ただそれだけの疑問を聞いたただけなのだが、リインにはこいつ何言っているんだという目で見られた。

「お主…何で四国を知らんのだ？　頭が悪いのか？」

「……」

きつとどこかでぶつけたかどうかを聞いたのだろう。

頭を抱えたい心境なのは確かだが、頭の悪い子のような言い方をされる覚えはない。

「本当に知らんのか？　四国を知らない人間がいるとは思わなかった」

「そう言われても、知らない物は知らないしな」

タイトの知っている四国は、徳島・香川・愛媛・高知の四県で、

そこにアクアなどと言うものは含まれない。

何より県を国とは言わないだろう。

からかわれているのかとも思うがしかし、リインの蒼い瞳の中には本気で心配そうな色がある…冗談でも何でもなく、知らないタイトの方がおかしいと思っている目だ。

おそろくだが、二人の間で話を通じないのは、リインがきつと“

知っていて当たり前”な事を前提として会話をしているからだろう。

それをタイトは知らないものだから、それがそのまま両者の理解のすれ違いに繋がっているようだ。

「お主本当にこの世界…アヴァロンの住人か？」

「……え？」

今のリインの言葉の中に聞き捨てならない単語に気づいたタイト

が言葉を失ってしまった。リインは…アヴァロンを“この世界”と呼んだのだ。

「…つかぬ事を聞くけど、四国の国名は？」

「アクア、フレイム、アース、ウインド、それぞれが水火地風の精霊を冠している」

ビンゴ、嫌な予感程良く当たるというジンクスは実在するようだ。しかも、精霊なんて、タイトの常識では実在しない単語が混じっていた。

これが全て何らかのドッキリだったら、タイト一人を騙すためにどんだけ無茶してんだよ！？と言うだろう、っというか叫ぶだろう。そして、タイトは自分の事をそんな価値のある人間などと過大評価はしていない。

あり得ない可能性を排除していくと、残った物がどんなに常識はずれでもそれが真実と言う事になるらしいがしかし…ここから導き出される答えと言うのは…。

「ま、まさか…」

「まあいい…今はそんな些事にかまけている時間はないのだ」

辿り着いた答え（予想）にタイトがうめくが、それを口にする前にリインが話の流れをぶった切った。

「え？」

「ぼうつとしている暇はないぞ、忘れたのか？妾達は追われているのだ？」

「ああ…」

本当ならこんな風に立ち止まって話をしている時間さえ惜しい絶賛逃亡中、何で追われる事になっているのか、その理由さえ知らなくとも、現状は変わらない。

忘れていたわけでは無いが、状況さえ理解できていない上に平和に慣れた日本で育ったタイトにとって危機感が足りないのも確かだ。

「タイト、お主もこのまま終わるとは思っていない？」

「それは…」

男達はリインを襲撃していて、そしてタイトは連中の目の前からリインを攫った…これで穏便に済むと思う奴は相当な脳腐れだろう。リインの言うとおり連中は“妾達”を追ってくる…つまり複数形で、そこにはタイトも含まれるわけで…既にタイトとリインをセツトだ。

「救ってくれた事には感謝する。しかしこれ以上妾の傍にいれば死ぬぞ?」

「う……」

冗談を言っているわけでは無いと、リインの表情が語っている。少なくともあの男…キールは本気だった。

本気でリインに殺気じみた狂気を叩きつけていた。

タイトがいなければ、あの男は本気でリインを…そしてタイトにとつても他人事ではない。

追いつかれれば、見つければ、今度はタイトにも同じ物が向けられるはず…いや、タイトに対しては遠慮がいらぬ分、本気で殺しに来るだろう。

死ぬかもしれないと断言されて、それで動揺しないほどタイトは鈍感では無かったし、自分から死にたいと思うほど物好きでも、世を憐んでもいないつもりだ。

「だ、だからってどうしろって言うんだよ?」

とはいえ、どこに行けばいいのかすら判らないタイトは圧倒的に選択肢が少ない。

そんな内心を読み取ったのだろうリインは、一つ頷くと身につけていた指輪やネックレス、イヤリングを外し、まとめてタイトに手渡す。

「他の物は全てやる。売って金にするがよい。だが、この指輪を…アクアの王城に届けて欲しい。そして保護を求めよ。妾にはリインという名の妹がいる。あいつならお前の事を悪いようにはしないはずだ」

最後に渡された指輪には宝石や装飾はついていなかった。リインくらの少女がつけるには無骨なデザインの蒼い指輪だが、その代わり指輪の中心には水を模った装飾が成されていた。

「……」

知識のないタイトには指輪がどう言うものかはわからないが、物を知らなくても分かる事はある。

「死ぬ気かよ？お前、人には死にたくないだろ？とかさっき言ってたよな？」

案の定…あるいは予想通りにリインはフツと笑った。

「責任ある身として自害も視野に入れている。折角助けてくれたのに悪いがな」

「あれは成り行きで…それに自害？討ち死にじゃなく自殺か？なんで？」

彼女も、自分と同じで自殺願望がある人間には見えないのだけだ。ど…。

「いや…連中に捕まっても命までは奪われんだろう…死んだ方がましという状況にはなるが…とりあえず手足の切断くらいはされるだろうな」

「それは…」

タイトは絶句するしかなかった。それが最低ラインなら、確かに死んだ方がましかもしれない。

本当に死んでいないだけの状態ではないか？

「この程度は基本だろう？チェンジリングの力を奪う方法は多くない。一番手っ取り早いのは、ウンディーネと取り替える四肢を切断することだしな、そんなのはごめんなのだよ」

チェンジリング？ウンディーネ？…またタイトには理解できない固有名詞だ。困惑するタイトの気配をリインが察して頷く。

「わからなくてもいい、重要なのは連中の目的が妾だということだ。一緒にいなければ、お主は連中の眼中にはない。十分逃げられる」
「だから自分が囹になろうって？」

それは何というか…自己犠牲が過ぎるのではないかと思うのだが？

「どの道逃げられんよ、この傷だし、毒も抜けていない」

脇腹からの出血は止まっているようだが、その顔色は悪い。軽い貧血になっているかもしれない。

「判っただろう？足手まといなんだ。それに、妾の死に意味がないわけでもないぞ？」

……自分が死ぬかもしれないというのに、それなのに誰にも、目の前にいるタイトにさえすがらず、あっさりと笑いがならそんな事を言える彼女の心理をタイトは理解出来ない。

死ぬ事に、どんな意味をこの少女は見ているのだろうか？

「さあ行け、アクアは…多分あっちだ」

結局、タイトにはその答えを見つける事が出来なかった。

リインが自分の血に濡れた指で一つの方向を指す。

地理どころか東西南北もどつちかわからないタイトに知る術はないが、おそらくその方向に彼女が言う所のアクアがあるのだろう。

それを見たタイトは一度大きく頷いて…ブチツときた。

「見よう見真似ちよっつぷ!!」

「な!？」

タイトに釣られ、同じ方向を見ていたリインの頭に不意打ちのチヨップが叩き込まれた。

あまりにも油断していたところに来た一撃に、かなりいい感じの音がする。

「ちっ、威力不足か？やっぱ見よう見真似でコマ先生のようにはいかんよな」

「な、何をする!？」

リインがチヨップを食らった頭を押さえて涙目になって抗議してきたが、逆にタイトは半眼で睨み返した。

「やかましい。黙れ馬鹿」

「ば、馬鹿!？」

今度はリインの方が面食らう番だった。

こんなストレートな罵倒など受けた事自体が初めてなのだろう。しかも、冷静で淡々としている…ように見えてその実、タイトは怒っている。

「ただ俺を鬼畜に見ているわけ？そんなもん聞かされてはいそうですかなんて終われないだろ？」

「し、しかしだな、これが現状では一番助かる可能性が…妾の事は気にするな、それでも覚悟は…」

「追撃のちよっつぶ!!」

「会話をする気がないのか貴様!？」

切れているらしいタイトは横暴だ。

気がつけば、タイトのチョップを白刃取りしているリインという、誰が見ても何だこりやな状態になっている。

本当に、さっきまで死ぬのは嫌だとか素面で言っていた人間と同一人物か？

「アンタの死にどんな意味があるか知ったこっちゃないし、自分の命をただ安く見ようと勝手だけど、それに俺まで巻き込むな」

「い、いや…妾は…そんなつもりは…」

「つもりがあるが無かるうが、言っている事はそう言う事だろ？」
タイトはリインの言葉に本気で怒っているようだった。

真正面からいらまれたリインがタジタジになる。

リインは間違った事を言っただけではない。

この状況で、タイトという巻き込まれた人間を生かすために、最善な行動であるのは疑いようはないのだから、しかし当の本人にこうまで反抗されるとは思っていなかった。

「し、死ぬのは嫌なんだろう!？」

「誰かの命を背負って生きていけるほど強くもないんだ俺は!!」
「何だそれは!？」

堂々と情けない事をのたまわれ、思わず突っ込みを入れてからリインはクラっときた。

誰かが犠牲になって自分を生かす事になれば、犠牲者の死は呪い

のようにその後の人生に影を落とす事を、リインだって知らないわけでは無い。

知らないわけではないが、それを堂々と背負えないと言った拳句、情けないオチまでつけられた。

「誰かを見殺しにして生きたら後味が悪すぎるだろうが！！そんな重いもん押し付けるんじゃないねえ！！」

「そ、それこそ個人的な理由では無いか！！」

「それがどうした！？」

「ひ、開き直るなーーー！！」

タイトと言う人間は、完全にリインの理解の外にいた。

互いに譲らない物だから話がすれ違いまくっている。

「動けないって言うなら担いででもアクアって国に連れて行ってやる」

「タイト…それはお前の意地か？…それともやけっぱちになっているのか？」

何故そこまで言うのかリインには理解できないが、一つだけ言えるのは、タイトは本気でリインを担いででもアクアに連れて行くつもりだという事だ。

「俺の精神衛生の為だ」

「ほんつきで言っているだろ！？何処までも自分本位だな貴様…」

「悪いかな？それで他人に迷惑をかけた覚えはねえ…」

悪いかどうかと言われれば…微妙だ。

あくまで今の所はという但し書きがつくが…。

「何なのだお主は…」

言い知れぬ無力感を感じて、リインは座り込んだ。

話を通じないというか、どこまでも平行線なやりとりをやたらと疲れを感じる。

「まだ追い詰められたわけじゃないんだろ？もうちょっとだけ足？
いてみようぜ。それでどうする？俺は担いでいく気満々なんだけど？」

「戯け、一国の王女が荷物のように担がれてたまるか。自分で歩く……その代わり責任は取れよ」

ため息とともにリインが折れた。

すでに時間を食っている……長話をする時間も限界だろう。

まだ追手の気配は感じないが、案外近くまで来ているのかもしれない。

「善処はする」

「そこは男らしく責任は取ると言えんのか？」

「そういう人間だから、俺」

やれやれとため息をついたリインは、自分に向かって差し出されたタイトの手に自分の手を重ねた。

顔には苦笑が浮かんでいたかもしれない。

「あ、あれ？」

その疑問符はタイトのものだっただろうか？それともリインのものだっただろうか？

喉の下からあがってくるものを感じたタイトが、その気持ちの悪さに抗えずにこみ上げてきた者を吐き出せば、二人の間の地面が真っ赤に染まった。

「タ、タイト……な、なんだそれは？」

今度は間違いなくリインの声だった。

彼女が呆然と自分を見ているのに気がついて……その視線を追いかけてみれば自分の鳩尾にたどり着き……真っ赤に染まった鉤爪が見えた。

タイトに見られたからというわけではあるまいが、鉤爪がタイトの体の中に引っ込み、背中から抜けた次の瞬間、タイトの前後からおびただしい血が流れ出す。

貫通していた鉤爪が引き抜かれた事で前後両方の傷口から一気に血が流れ出したのだ。

「タイト……！」

倒れようとしたタイトの体をリインが抱きしめて支える。

既にリインの血の色に変色していたドレスが、タイトの血を吸って更に色を濃くした。

「すまないね、少年、姫様を連れて行かれると困るんだよ。依頼が果たせない」

木の上から飛び降りてきたのは、変わらず糸目を弓なりに曲げているキュールだ。

遅れて他の連中も駆けつけてきて周囲を包囲する。

「貴様どうやって気取られずに…」

「簡単ですよ。まともに近づいては気取られると思ったので、上からこっそりと忍び寄っただけです」

そう言くと、キュールは長腕のネリーの手を伸ばして上のほうの木の枝を掴む。

「水の邪妖精が森の獣の真似事か!？」

「種を明かせば大したことではありませんが、便利でしょう?」

悪びれることなくそう言っていると、視線をリインからタイトに向けた。「即死させてやれなかったようですね?」

キュールが残念そうに呟いて、大げさに肩をすくめた。

タイトを胸に抱いたまま、リインが怒りの視線でキュールを睨む。「ひと思いにと思っていたのですが…かわいそうな事をしました」

演技臭い動作で肩をすくめるキュールに、もはや口をきくのも不愉快と、リインを中心に蒼の力が集まってくる。

「宜しいので? チェンジリングの初歩を知らないわけではないでしょう? そんな状態でウンディーネの制御など、無茶をすれば命に関わりますよ?」

「貴様の知ったことか! そのにやけ顔を止めてやる。来い、ウンディーネ!」

タイトを抱きしめたまま、リインは己の中にいる存在の名を叫んだ。

…死ぬな。

リンの胸に抱かれたタイトはそんな事を考えていた。傷は背中を中心に貫き、背骨を粉碎して内臓を抉り、前に抜けている。

医学知識があろうとなかろうと完全な致命傷だと理解できる…出来てしまう傷だ…おそらく心臓も傷ついているのだろう。

不幸中の幸いというべきか不幸というべきか、即死にはなっていないらしい…あまりにも傷が深すぎて脳が痛覚を麻痺させているので、殆ど痛みは感じない。

…こりゃダメだ。

死が確実とわかると、生存本能もへつたくれもない。

むしろ色々な物に対して執着が薄れるものらしい、己の生死すら冷静に見る自分がいる。

周りで何か言いあっているようだが、声がやたら遠くに聞こえるので言葉がわからない、頭が上手く働かない。

リンがかなり感情的になっているだろうという事は、タイトの体を力いっぱい引き寄せる動作でそれと判かるのだが……今更だが、彼女には悪い事をしたと思う。

せっかく忠告して逃がしてくれようとしたのに、タイトだけでも助けようとしてくれたのに、突っぱねた結果がこのざまだ。

自分が間違っていたとは思わないが、そんな彼女の気持ちを無駄にってしまったことだけは申し訳なく思う。

タスケテ

…え？

朦朧とする意識に、その声は驚くほどはっきり聞こえた。

オネガイ、タスケテ

幻聴では無いようだ。

救いを求める誰かの声が聞こえる。

…お前か？

霞む視界の中で、何故かリインの背後に立つ蒼い騎士の姿だけがはつきりと見えた。

…確証など何もないが、騎士が瞳だけで自分を見ている気がする。理屈ではなく、直感的な部分で理解した。

マスターアブナイ…マスター、タスケテ

…マスター？リインの事か？

リインの背後に立っているから、おそらくそうだ。

タイトだって、本当にこのままでいいと思っているわけでは無い、むしろこのままでは死ねないと思っている。

自分で他人に死ぬ事の重荷を押し付けるなと啖呵を切っておいて、自分がリインの重荷になるなんてまっぴらごめんだし格好が悪すぎる。

彼女がタイトの死に責任を感じたり、泣いたり怒ったりするのは何か違うだろう。

何より目の前でひどい目にあわされそうな女の子を放って置くなど、男として以前に人間の沽券にかかわる。

このまま死んだら絶対後悔する。

心残りで自縛霊になるかもしれない。

…でも、こんな俺にどうしろって言うのさ？

だがしかし、現実是非情で、起こってしまった事は覆せない。
今のタイトの体はほとんど死に体だ。

おそらくはもって後数分の命…それが真実で事実で現実だ。

チカラ…カス…ツカッテ…マスタータスケテ

騎士は本当にリインを救いたらしい。

どう見ても高位っぽい存在なのに、言葉に懇願が滲んでいる。

アナタナラデキル…アナタニシカデキナイ

…まあいいか、解った。

タイトはもとも物事に対して深く拘らない性格だし、必要以上に執着もしない。

本人が使えるというのなら使えるのだろう…使えなくてもこのまま死ぬだけならば大した差はない。

これで終わりというのなら尚の事…それでリインが責任を感じなくて済むのなら、それだけで理由は十分、足掻く価値はあると思う。

…リインにも責任を取れって言われたしな…。

自分の吐いた言葉の責任くらいは取らねばなるまい。

嘘は必要なときにしかつくべきではないし、少なければ少ないほどいいのだから。

アリガトウ

騎士の声には喜びの感情が含まれていた。

同時に、死にかけている自分の中に、異質な何かが入ってくるの

を感じる。

…なあ？

ナニ？

…俺をこの世界に呼んだのは…お前なのか？

……。

否定でも肯定でもない…沈黙という返事には、どんな意味があったのだろうか？

「何！？」

リインは思わず驚きから声を上げた。

いつも感じているウンディーネとの一体感がいきなり途切れたからだ。

こんな事は今まで一度もなかった。

怪我のせいで同調率が下がったかと思っただが、ウンディーネは変わらずそこにある。

「…馬鹿な」

リインは信じられないものを見た。

確かにウンディーネはそこにあり、そして取替えをしようとしている…しかし、その相手はリインではない。

ウンディーネが溶けるようにして降りてゆくのは…タイトの中…あり得ない。

その異常性を見て理解した男達も、啞然として成り行きを見守っている。

やがて、ウンディーネの体が完全に消え去り、蒼い粒子がタイトを包み…”全身”が取り替えられた。

「オ…オオ…」

低い獣のような声を上げながらリインの腕からはなれ、立ち上がったその姿に、タイトの面影はまったく無い。

あるのは完全な形で実体を得た蒼の騎士…ウンディーネ…リインはしっかりとした実体を持ち、両の足で大地に立つ自分の精霊を見て、震える声を漏らした。

「まさか…リミット…ブレイク？」

啞然とした声には畏怖と…恐怖が含まれていた。

結

「くそ!!」

大柄な体躯を持つ騎士の鎧を着た男が、森の中を全力で駆けながら悪態をついていた。

「不覚!!このランド・カルア一生の不覚!!」

己の不甲斐無さに、憤死しそうになる苛立ちを、手近な木に叩きつけた。

彼：ランド・カルアはアクア国の王女、リイン・アクアの護衛騎士だ。

急時にはリインを守り、盾となる義務があるが、そんな物がなくともランドは主であるリインに心からの忠誠を誓っている…それこそ命を賭ける覚悟もある。

時々、リインから「お主、ちょっとどころではなく暑苦しいぞ?」

と言われるのだが、それは忠誠心の高さ故なのでランド的にはまったく何も問題ないとか思っていたりもする男だ。

だがしかし、守ると誓いを立てた肝心の守るべき対象のリインは今、ランドの側にはいない。

護衛の一人もつけず、この深い森の中をさまよっている。

リインの”お披露目”自体は何の問題もなく終わり、帰りの道程だと言う事で自分を含めた護衛団に弛緩した物があつたのは確かだ…そんな気の緩みを衝かれた。

リインを乗せていた馬車と自分達の間には岩を落とされ、慌ててリインの元に駆けつけようとしたところに、更に分断するように盗賊風の団に割り込まれ分断されてしまった。

「いや、今は姫を探すのが先だ」

過去は変えられない。

今この時に何を言おうが所詮、言い訳にしかない。

反省は後でも出来る…幸い、リインが馬車から脱出して森に逃げ込

んでいったのは見た。

残念なことに連中の一部が追いかけていったのも見えた。

いくらラインがウンディーネを宿したチェンジリングとは言え、“同じ”チェンジリングであるカルアには、その力が必ずしも絶対ではない事も知っている。

「おのれ下種な襲撃者共め…姫を捕らえてどうするつもりか！」

何を想像したのか、ランドが急停止して歯軋りしたポーズで固まる。

「ゆ、許さん！！姫の貞操はこのランド・カルアが守る！！…によぼぼ！！」

ゴツンと…形容すればそんな音がランドの頭上でした。

見れば結構大きな石がランドの頭に絶妙なバランスで乗っている…つまり、石がランドの真上の頭上から落ちてきたらしい。

石の質量は当然、重力に引かれ下方向のベクトルを持つ…重さがそのまま衝撃となり、頭頂部から顎の下に突き抜け、ランドに地面との熱烈なキスを強要した。

石と地面の間でサンドイッチになったランドの頭の上で、結構硬そうなお石が真つ二つに割れる。

ランドの石頭と天然の石の勝敗は石頭に軍配が上がったようだ。

「く、ぬぬぬ…また不意打ちか！？おのれ卑怯ものめ！！姿を見せよ！！…ぶばー！！」

痛みに耐えて起き上がろうとしたランドの根性は感動的だが、その頭を今度は素足が踏みつけて地面とセカンドキスを強要する。

「ランド？貴様…誰のどんな姿の妄想を抱いた？」

降って来たのは聞き覚えはあるが、絶対零度の声だった。

「ひ、姫？」

何とか首を曲げて横目で見上げれば、捜していた当人がいる。

折角のドレスは所々が裂けて彼女の素肌が覗いて見えるし、血まみれだが五体満足に両の足で立っている。

彼女が無事なのは安心したが…敬愛する主は薄ら笑いの怒り顔というなかなか難しい表情でランドを睨みつつ見下している…アレ

はケダモノを見る目だ。

「…私の人に言えぬ姿は鼻から血を流すほど過激な物だったのか？さすがにちよつと鳥肌物だなゝ奥方にチクツて良いか？」

「それだけは平にご容赦を！！まだ新婚一カ月なのです！！」

ランドが必死で弁解する。そんなに嫁さんが怖いのか？

「つてあ…いえ、これはですね…妄想の産物と言うより、二度の地面とのスキップの成果というか…」

「ほう、地面と親愛の関係を築けるとは、私には全然真似できぬなあゝ」

ラインの嫌みに、ランドはうつ伏せの状態で汗をだらだら流した。

ラインの様子がおかしい。

こんな彼女を見たのは今回の旅に出かけるための荷造中、一部をぶちまけてしまった時以来だろうか？…ぶちまけてしまった荷物が下着一式だったのが最悪だった。

ウンディーネのランスで突き殺されそうになったときには本気で死を覚悟したが、目の前のラインはそのときに勝るとも劣らない。

「ご、ご無事のように何よりです。中々先鋭的で扇情的なドレスです。ね？過激な装いもお似合いです」

ラインの機嫌を取る為に服を褒めてみたら…また踏まれた…四回目だ。

しかもグリグリと足を捻られて地面で顔がヤスリ掛けされてうめき声も上げられないほど真面目に痛い。

このままでは何かに目覚めて、人生がとんでもない方向に折れ曲がってしまいそうな気がして来た…これまた離婚に勝るとも劣らない危機を感じる。

女性の機嫌を取りたければ、まず服等を褒めると新妻に言われた事を思い出して実践しただけなのに…。

「ご、護衛の任を果たせず申し訳ありません！！」

「ん？ああ、そんな事気にしておらぬぞ？」

「はい？」

気にしていない？…つまりリインはランドを責める気はないと？

確かに、彼女ならばあの状況は仕方がないと理解してくれるだろう。しかし、それならばリインの機嫌が悪い理由が分からない。

何とか開放してもらおうとランドは身をよじってリインを見上げた。「おや、姫様？何時の間にそんな大胆な下着を着るようになったのです？」

まあ……頭を踏みつけられた状態で上を見上げれば、スカートの中身が見えてしまうのは当然である。

「……」

「城を出るときに広げてしまった物の中にはなかったように思いますが？具申ですが、姫のような年齢の女子には少々冒険と背伸びのし過ぎかと」

「……」

「おぶー！」

無言になったリインの爪先で頬を思いつき蹴りあげられ、ひっくり返ったランドは問答無用でマウントを取られた。

腹の上にリインがいるという官能的なポジション取りだがしかし……そこにアダルティな要素は皆無だ。

むしろ今のリインには、獲物にとどめを刺そうとしている雌の肉食獣が幻視出来る。

リインは極上の笑みのまま、女性優位な体位から、固めた鉄拳を下敷きにしたランド相手に振るう……何発も……。

「……ランド？お前の嘘をつけない性格は妾も好ましいとは思っている」

「ヴァイ」

「だが同時に、妾は常々もう少しデリカシーその他を身に付けると言っているよな？よもや忘れてはおるまい？」

「ヴぁい、むおうしヴぁけありません」

リインの前に立つランドは顔を蒼瘧で飾り、笑えるくらい盛大に鼻血を流していた。

ランド・カルア：この男は嘘のつけない性格のお陰で信頼は置けるのだが…思った事をすぐに口にする悪癖だけはどうかしてほしいと本気で思っている。

恥女では無いリインとしては、決して下着を黙って覗いているとは言わないが、もう少しオブラートにくるんではいいと思う…っと言うか包むべき状況と話題だろう。

王族だろうが平民だろうが、女の子の心はデリケートなのだ。

「本当に今日は厄日だな…」

俊足の…何だったか？

とにかくそいつと言いつつランドと言いつつ一日に二度も異性に下着を見られてしまうとは…しかもよく似た状況で、乙女のプライドとか羞恥心とかボロボロだ…などとリインが考えている間に、ランドの鼻血が止まっていた。

「これだから地属性は…」

ランドは地属性のチェンジリングなので、地属性の恩恵により身体能力は人一倍頑丈で高い。

回復も早いので、ついつい八つ当たりも込めてやりすぎてしまうのはリインの方の悪い癖だ。

今のところまったく良心が痛まないのは相手がランドだからと言う一言に尽きるが…このままではうっかり思い余って他の誰かに似た対応をうつかりやらかしてしまわないか心配になる事もある。

「さて、冗談は…いい加減このあたりにしておこう」
切り替えなければ話が進まない。

やらなければならない事は山積みなのだ。

「は！」

リインの言葉に、ランドが騎士の顔になる。さっきまでの三枚目なランドはどこかに行ってしまったようだ。

「残りの襲撃者は既に殲滅済みです」

「後は私を追ってきた連中だけと考えて良いか？」

「御意」

「被害は？」

「数人、剣で切られましたが命にかかわる者はいません。今は最初に襲撃された場所で治療を、残りは姫を探しに森に散っています」
ランドからの報告を聞いて、リインは頷いた。

「思ったより被害が少ないな、よくやってくれた」

「いえ、それよりまだ襲撃者の生き残りが？」

「ああ、とは言え十人にも満たんが、後は私が手にかけた」

「そう…ですか…」

返答を聞いたランドは複雑な思いだった。

致し方なかった状況で、リインにそれを撃退する力があればそれを振るうのは必然だ。

そしてリインはそれを気にしていない。

血にまみれようと躊躇なく剣を振るい、ウンディーネの力を振るったのだらう。

だからこれはランドの勝手な感傷だとわかつてはいるが…しかし、本来ならば蝶よ華よと愛でられるべき少女が、こんな血まみれで泥だらけになり、死臭を纏わりつかせている姿には胸が痛む…しかし、ここは未だ戦場の中…ランドは感傷を殺してリインに問いかける。

「いかなさいますか？このまま残りを殲滅するか…捕虜にして情報を得ますか？…む？」

ランドがリインを問いただそうとして…できなかった。

近く…今いる場所からさほど遠くない場所で怒号と悲鳴が聞こえてきたからだ。これは…戦闘の音だ。

音はリインにも聞こえたようで、ランドが振り向いたのと同じ方向…つまりリインがやって来た方向を見ている…その顔が悔しげに歪んでいた。

「チツ、連中…耐え切れなくなつて仕掛けたな!？」

吐き捨てるように言ったリインに、ランドが気づく。

「姫、一体どういう…何が起こっているのですか？」

「…このままここにいろ…。」といつても聞くまいな?」

「当然です!何をおっしゃつておられるのです!？」

折角見つけたのに離れてたまるかと言つゝ氣迫が見える…これはだめだ。

引き離そうとしてもついてくるだろう。

「やむをえんか…」

リインは諦めた。

今のリインは無力で、どの道護衛は必要だろう。

それならば、巻き込む相手がランドと言つのは悪くない。

「ランド、今日これから見るものは他言無用だ。もしどこから漏れたなら、お前の命をもらつ」

脅しでない証拠に腰の剣に手をかけ、殺気を放つ。

ランドもそれを見て内容は理解できなくても、事の重要さを悟つたようだ。

冷や汗をかきながら…それでも退く気はないという顔をして頷いた。

「御意」

「…行くぞ…きっと信じられないものが見れるはずだ」

要領を得ず、何の情報も得られなかったが、ランドはリインについて駆け出した。

そしてほどなく彼は、リインが言つたとおり、信じられないものをその目で見ることになる。

目の前にいる異形に対する恐怖…そしてそれに背を向けたくないという二律背反はリインの逃亡を許し、襲撃者達の忍耐をがりがりと削り、限界に至るまでそう長い時間はかからなかった。

最初の一人の緊張が切れるとなし崩しに全員に伝染し、彼らは自分の武器である剣を構えて中央に立つタイト…ウンディーネに殺到した。

殺気、怒声の渦の中で、中心だけが“水のように”静かだった。

向かってくる数本の鉄の輝きに大して、ウンディーネは動かない。文字通りの意味で指一本、身動きさえしなかった…剣は何に遮られることなく、ウンディーネの装甲に当たり、甲高い金属音、火花、そして破砕音を奏でる。

「そんな!？」

「うそだろ!!」

ウンディーネは本当に何もしていない。

ただそこに立っていたただけなのに、それなのに襲撃者達の剣は折れ、反動で腕の筋を痛めた者もいる。

それも当然で、精霊の装甲は属性による強弱こそあるものの、ただの鉄に切られる代物ではない。

「……」

不動だったウンディーネだが、いきなり動いた。

右手のランスを自分の死角に向けて振ると、金属同士が弾きあう音と共に何かが迎撃される。

「クツ!!」

弾き返されたのは蛇のように長く伸びた腕…長腕のネリーの腕、苦い表情で舌打ちしたのは腕の持ち主であるキュールだ。

性懲りもなく死角からの不意打ちを仕掛けたものの、完全な形で反応され、逆に体勢を崩れる。

生まれた隙にウンディーネが攻勢に出た。

足型をつけながら地面を踏み砕き、一瞬でゼロからトップスピードに至ったウンディーネに、周囲にいたものは誰もついていけない。

リンも早かったが、この動きはそれを越えている。

ほとんど瞬間移動のレベルでウンディーネがキュールの目の前まで移動した…これが全身を取り替えたチェンジリングの…精霊の力な

のか？

「ぐお！！」

間一髪：キュールがしのげたのはウンディーネの軌道があまりにも真つ正直な直線移動だったから：それでも尚、来ると感じた瞬間に全力で守りを固めて受け止めていながら、轢き殺されそうになるほどのプレッシャーにキュールの体は軋み、苦悶の声が漏れる：スピードだけではない、明らかに膂力も増している。

「貴様：貴様は何なんだ！？」

キュールの人を馬鹿にしたような口ぶりが崩れている。

糸のような目は限界まで見開かれ、ウンディーネを睨みつけてはならない……いや、これは恐怖で目を離す事が出来ないのだ。

チェンジリングであるキュールには、自分が相手をしている存在の異質さがなおの事理解できるから余計に：何故ならば、今目の前にいる存在を：その名前をキュールは知っている。知っているからこそ信じられない。

それは、チェンジリングの御伽話の中だけの“存在”のはずだ。

「何で、よりによってこんな所に【リミット・ブレイク】が出てくるんだ！！！！？」

ウンディーネの振るう槍を避けながら、戦慄の中でキュールは思う：目の前にいるのは正しく化け物だ。

「く、クソツたれが！！」

ならば攻撃させなければ良い。

いかにランスが長いとは言え、射程距離は長腕のネリーのほうが長い。

既に突撃態勢に入りかけているウンディーネに向けて、キュールは腕の伸縮を繰り返し、それによって弾幕を張る。

突っ込んでくれば鋭い爪で無数の穴が開くだろう。

「……」

だが：ウンディーネはやはり一直線に来た。

その軌道も変わらないが、先ほどまでの特攻と唯一違うのは、槍を

前に突き出すのではなく、頭上に大剣の如く振り上げている事だ…
そして激突…血が舞う。

「う…ぐ…」

「……」

二人がすれ違い、片方からは呻き声上がり、もう片方は無言…そして両者の中間にボトリと落ちた物は…腕だ。

肩口から切断された人間の左手、切り口からは赤黒い血が流れ出していた。

「ぐ…があああ!!」

耐え切れず悲鳴を上げたのはキュールのほうだった。

振り返ってそれを見るウンディーネの胸には切傷がある。

キュールが腕一本を代償に勝ち取った戦果だが、致命傷には程遠いそれは瞬く間に塞がり、鎧は元の形を取り戻した。

実体を持った精霊そのものであるウンディーネは生半可なダメージはダメージになり得ないらしい。

「う…あ…」

呻くような声は周りを囲んでいる男達から聞こえた。

全員が震えている。

「い、いやだ…何でこんな化け物の相手なんかしなきゃならないんだよ!？」

「こんな事、聞いてないぞ!!」

「お、お前達…」

まず一人が逃げ出し、それを引き金に他の連中も悲鳴を上げてウンディーネから逃げ出し始めた。

「え? な、ええ?」

リインは隣にいるランドが、ウンディーネと自分を交互に見るのを無理のないものだと思う。

ランドでなくても混乱するのは必至、かくいうリインも平常とは言い難い。

隣のランドがあわててくれているので取り乱さずにすんでいるが、キュールはそうはいかない。

【リミット・ブレイク】…そして本来のチェンジリングでは無い者によるウンディーネの取り換え…どちらもあり得ない事だ。

そんなあり得ない物を目にした驚きがなければ、あの男ももう少し冷静な戦術を組み立てられただろうか？…いや、それでも遅いか早いかの差でしかないのかもしれない。

「ひ、姫？お伺いしたい事が…」

「無理だ。…いや、答ええないと言う訳でなくて、今お前の感じている疑問の答を私は持つていないのだよ」

「さ、左様ですか…」

答があるとすれば、誰より先に知りたいのはリイン自身だろう。

あそこにいるのは他ならぬ自分の精霊なのだから…。

「れ、連中は統制を無くして逃げ出し始めているようですが…いかがいたしましょう？」

「あ、うん…あいつらをこのまま逃がすわけにはいかな…ランド、逃げた連中を追え、一人も逃がすな、そして最低一人…できれば二人は生かして捕らえろ、背後を洗うために必要だ。口が利けるなら後は構わん」

それを聞いたランドの顔に影がさすのをリインは見逃さない。

この男に甘い部分があるのは先刻承知だ。

尤も、甘いのは敵に対してではなく自分達に対してだと言う事も分かっている。

「主命である。行け」

「御意」

平時ならそれを笑ってもやれるが、状況が状況だ…構っていられない。

一瞬でランドが戦士の顔になる。

彼にも危険がないとは言えない…甘さは今は必要ないのだ。

「姫は？」

「今の私は役立たずだ。ここにいる」

そう言つてリインはウンディーネに視線を戻す。

「…忘れるな、ここで見たことは他言無用だと言つた事を…誰かに話せば、その首撥ねる」

冗談でも嘘でもない。

目の前で展開されている光景は、そうまでして秘匿しなければならぬ物だ。

そして必要があれば、リインはその立場と責任から彼の首を落とす必要がある、覚悟を決めねばならない。

「…ご安心ください。その時は姫のお手を煩わせる事無く、自分でこの首を搔つ切りますので」

「……馬鹿が、お前が誰にも喋らなければ良いだけの事だろう？」

ランドは答えず、無言で頭を下げて駆けて行つた。

リインは去つてゆく部下の背中を見ない。

「くそ…不器用者め…」

それはランドに向けたものだろうか？

それとも己自身に対するものか？

リインは間違つていない…それは確かだ。

”精霊”であるウンディーネの持つ意味は一国の…アクアの未来まで左右しかねない代物であり、騎士一人の命には比べられない。

それが王女としての正しい判断だ。

ただ…公と私を使い分けるには、彼女はまだまだ経験が足りないだけの話で…リインは色々な物を振り切る為に頭を振つた。

「今はウンディーネだ」

それだけ考えていれば良い。

「…リミット・ブレイクか…まさか伝説級のそれを成しうるチェンジリングがいて、この目で見ることが出来るとはな…」

様々な思いの籠つたリインの言葉は重い。

チェンジリングはすべからく自分に取り憑いた精霊・妖精との同調率を上げることが第一とする。

同調率が高いほど、取り替えられる部位は増えて行き、それに比例して行使できる精霊・妖精の力も大きくなってゆくからだ。

そして、100%を超える同調率とそれが出来る人間を指して【リミット・ブレイク】と呼ぶ。

【リミット・ブレイク】に到達した者は、全身を交換し、精霊・妖精その物となって彼らの持つ力を十全に発揮できる…といわれているが、アヴァロンのけして短くない歴史を紐解いてみても、そんな同調率をたたき出したチェンジリングの記録はない。

故に伝説か、あるいは御伽噺で語られる存在だった…今までは…今日この場でその常識は打ち碎かれた事になる。

「アレがチェンジリングが目指す場所にして…“到達してはならない”と言われている場所か…」

リインは口の中に溜まったつばを飲んだ。
喉が渇く…緊張しているし、緊張せざるを得ない状況に無意識に体がこわばる。

【リミット・ブレイク】は確かにチェンジリングの目標であり、最終到達地点だが同時に、そこにたどり着くためには“代償”が必要だといわれている…リインの脳裏に、ほんの短い間ではあったが、共にいた少年の顔がよぎった。

彼は…代償を支払ってしまったのか？

「……」

未だに戦闘が継続しているというのに、ウンディーネはじつとその場に立ち尽くしたまま…自分の体に飛び散った血を拭うでもない。ただそこにたたずんでいるだけだ。

そこにあるだけの蒼の騎士の姿は…周りの自然と一体化するように一つの芸術を作り出していた。

森の深緑に蒼が映える。

「タイト…お前は、”まだタイトのまま”なのか？」

あまりにも美しすぎる芸術：しかしそこに、人の意思が介在する余地はあるのだろうか？

「ち、ちくしょう…」

失った左手の痛みに呻きながら、キュールがウンディーネを睨む。痛みは激痛と言っているいい物だったが、おかげで逆上していたキュールの頭が逆に冷えた。

「…待て」

「ひつつー！」

周囲を見回す事が出来るようになったキュールの目に飛び込んできたのは、逃げ出そうとしている男達の背中だ。

残った右手をのぼすと、逃げ遅れた男の一人を捕まえて自分の足元まで引き寄せる。

「何所に行くつもりだ？まだ仕事は終わってないぞ？」

「だ、だって負けたじゃないですか、逃げるが勝ちですよ！！」

「……」

男の言葉は間違いではない。

左手を切り飛ばされた以上、キュールはもう左手を【長腕のネリー】と取り換える事は出来ない。

文字通りの意味で、キュールの戦闘力は半減している。

だから男の言葉は正しい。

正しいのだが…それを聞いたキュールの目が血走る。

「誰が…負けただと？」

「う…ああ…」

その形相に男が震える。

首を締めあげる右手に、泡を噴き出し始めた。

キュールが鬼の形相のまま前を見れば、彫像のように立っているウンディーネがいる…仕掛ける隙はいくらでもあったはずなのに何も

せず、ただそこにいて自分を見ているだけだ。

肩には小鳥まで止まっついていて、とてもじゃないが戦闘中の風体では無い…それを見たキュールが切れた。

「なめてんじゃねえぞ糞野郎!!」

「や、やめ…止めてくれ!!嫌だー!!」

キュールが、男を腕一本で投げつけた。

悲鳴を上げながら飛んで来る男に気がついた小鳥があわてて飛んでゆくが…ウンディーネはやはり動かず、ただランスを前に向けて構えた。

「ごふ!!」

グサリと肉を抉る音と共に、ウンディーネに血の雨が降り注ぎ、蒼の精霊が血の朱に染まった。

ランスに胸を突かれた男は当然即死、絶命した次の瞬間、ウンディーネの右肩が爆ぜた。

「……」

流石のウンディーネも思わずよろめき、槍に刺さって死んだ男の体が抜けて地面に落ちる。

「くそ、外したか!？」

キュールが忌々しそうに睨んでくる。

ウンディーネの右肩を抉ったのは【長腕のネリー】の爪…この男、またもや部下を囿に使ったのだ…戦意をなくし、逃げ出した人間を無理やり捕まえてまで。

「しかし、かなり具合が悪そうじゃないか？」

ウンディーネの右腕はキュールの言うとおり、肩の三分の二は無残に切断されて千切れかけている。残りの部分で何とかくっついている状態だ。

キュールが片腕をなくして体のバランスが崩れていなかったら、肩ではなく心臓をえぐられていただろう…しかし、何とか体にくっついていて状態の右手では、重いランスを振り回す事など出来ないの…は一目瞭然であり、傷口からは白煙が上がっている。

キュールの顔が冷血な蛇のように嘲りで歪む、そろそろ本性が出てきたらしい。

こちらの方が、この男にとって無理がない。

「とっておきの猛毒を叩き込んでやった！そのまま千切れてしまえ！！」

キュールが言う所の猛毒の効果か…胸の傷は直ぐに修復できたのに肩の傷はなかなかふさがらない。

となると残った左手だけで戦わなければならないが、ウンディーネの左手は、蛇の牙のような【長腕のネリー】の鉤爪に比べて頼りなく、向うには更に毒が付加されている。

一瞬で彼我の戦力が逆転していた。

「……」

圧倒的不利な状況に追い込まれていながら、ウンディーネは反応しない。

喋る気がないのか…それともそもそも喋ることが出来ないのか…あるいは“喋る言葉を失った”のか…その代わり、ウンディーネの答は行動で表された。

キュールを前にしたウンディーネの…その動かない右手のランスが蒼白い光を放ち始めている。

「精霊術を使うつもりか？」

ウンディーネを誰より良く知るリインが真っ先に気がついた。

右手のランス…あれは実は武器ではない…一見槍に見えるその正体はアンテナだ。

精霊と呼ばれ、妖精とは別格として見られる存在であるウンディーネは、他の妖精達にはない幾つかの能力を保持している。

その能力の中に自然界に対する干渉だ。

精霊や妖精が自然界に影響を与えるこの行為を精霊術と言い、ウン

ディーネの場合は属性の水を操るということになるが、それ自体は珍しい事ではない。

他の水の属性の精霊でも可能だ。

ある意味で基本と言っても良い能力だが、ウンディーネの影響力は他の妖精の追隨を許さないレベルで自然に影響を与える事が出来る。これはウンディーネだけでなく、他の三つの精霊にも言える事であり、四精霊は精霊術に特化した存在と言う事が出来るのだ。

リインが取り換えを行った場合であっても、荒れ狂う洪水の川の流れを変え、大津波を割ることくらいは容易いほどに、その影響力は絶大なものがあるが、今のウンディーネは【リミット・ブレイク】に辿り着いている。

今のウンディーネの影響力がどれほどに跳ね上がっているのか、本来のチェンジリングであるリインにも分からない。

「しかし…この場には…」

ただし、強大な力を振るえるウンディーネの能力には制限が存在する。

そもそも自然とはいきなり消えたり現れたりするものではない。

そこに在り、あるいは移動する物だ。

故に、ウンディーネの場合は水のない場所ではその力が恐ろしく低下する一面も同時に持っている。

空気中から水分を集める事が出来なくもないが、飲み水にするならともかく、戦闘に使うには到底足らない。

だからこそ、リインは追い詰められても精霊術を使う事が出来なかったし、それを見越してキュールはこの場で仕掛けてきたのだ。

「何をするつもりだ？」

水のないはずの場所で、水の精霊術を行使しようとするウンディーネから、リインは目が離せなくなった。

「な、何を…何をしようとしている!？」

リンほどウンディーネの事を熟知していないとは言え、キュールも同じチェンジリングであり、【長腕のネリー】もまた水属性の妖精だ。

ウンディーネが何をしようとしているかに気づかないわけがない。

「何をしようとしているんだ貴様は!？」

平常心であれば、キュールも鼻で笑うくらいの余裕はあっただろう。

「こんな場所で精霊術が何の役に立つのだ?」と…しかし、既に何度も予想を裏切り、ありえないことを目にした後では無理だ。

「し、ねえええええ!！」

放たれる凶刃は一直線にウンディーネに向かう。

ずっと不意打ちに徹して来たキュールが、フェイントすら用いず真正面から仕掛けた事が、彼の混乱の度合いを表しているだろう。

本来ならば、ここは一旦退くべきだった。

まだ近くにいるであろうリンを見つけて人質にすると言う手もある。

だが…何をするのか、何が起こるのかわからない未知数の恐怖に屈したキュールの思考は安易な行動を選択した。

抜き手に構えた【長腕のネリー】の手が矢のように飛び、石を挟むような音と共に“それ”に突き立った。

「な…!？」

返って来た感触と目の前の光景に、キュールの口から驚きの悲鳴が上がった。

ウンディーネがいるのは変わらないが、その姿に変化がある。

無事な左手が掴み、差し出しているのはキュールが不意打ちの為に投擲して、ウンディーネのランスに刺し殺された男…物言わぬ軀に鋭い切っ先が刺さり、そこで止められている。

「ありえない…何をした!？」

【長腕のネリー】の腕は人体を易々と貫く…それは他ならぬタイトの体で証明され、ウンディーネの装甲ですら貫き、右手を死に体と

した事を見ても、その威力は保証されているはず…なのに、全てを貫くはずの【長腕のネリー】の貫き手は男の体を貫通することなく止められていた。

「あれは…凍っているのか？」

第三者の視点で見ていたリインが一番冷静に、一番早く答に行き着いた。

ウンディーネの手にある男の死体に霜が降りている。

今は昼間であり、真冬でも日のある内から霜が降りるわけがない。

しかも、あの男はついさっきまで生きていた。

それが何もせずに、冷凍されたような状態にいきなり変じるのは明らかにおかしいだろう。

「ウンディーネの…仕業なのだろうな？」

簡単な理科の知識があれば誰にでも分かる事だ。

ウンディーネの司る水は、温度によってその形態を変える事で知られている。

おおよそ0度を下回ったときに固体となるが、これは水を構成する水分子の活動が停滞するからだ。

逆に言えば、分子そのものの結合を促す事が出来れば、常温による固体への変化も可能となる。

そして、人体の殆どは水分を初めとした液体：ウンディーネは、死体の中の水分に干渉し、結合させ、固めて長腕のネリーの攻撃を受け止める盾としたのだ。

氷は、冷やせば冷やすほどに分子の結合が促され、硬度を増す。

水分子を石の様に固めれば、あの一撃を受けることも可能だろう。

「しかし…そんな事が可能なのか？」

理論自体は単純で簡単な物だ。

リインにもやろうと思えば可能だろうが…問題はその速度、いくら

何でも早すぎる。

【長腕のネリー】の攻撃が届くまでの一瞬で、死体を完全に固めてしまえるかと言われれば、リインの答はNOだ。

「これが、限界を突破した者のポテンシャルか？」

しかし…と呟いてリインは死んだ名も知らぬ男の死体を見る。

いかに死体とは言え、それを状況の一つ、手段の一つ、道具の一つとして考え、躊躇なく利用する思考は人間のそれだろうか？

しかもタイトは、さっき自分に命は重いと諭した男だ。

その彼と、今リインが見ているウンディーネの姿が、どうしてもイコールで結ばれない。

「タイト…お主やはり…」

リインが辛そうに見る先で、ウンディーネが【長腕のネリー】の右手を掴んだ。

「ぐ！離せ！！」

掴まれた腕の装甲を、ウンディーネの左手の爪が貫いて固定しているキュールは痛みに顔をしかめながらも振り払おうとするが、ウンディーネの爪は刺さったまま抜けない。

同じ属性同士ならば、その膂力に大きな差はないが…それだけじゃない…それだけじゃ済まなかった。

「な、何だ？」

自分の身に起こっている違和感にキュールが気づく…熱いのだ。

真冬の寒さと言うわけでもないのに、体から水蒸気が上がり、全身に熱い汗が滲んでいる…体が真つ赤に発熱していた。

熱中症患者のようにめまいを起こし、おぼろげな思考でキュールは自分の体の変化を考え、理解した瞬間青ざめた。

「お、お前…俺の体内の血液を…」

水の分子の動きを停滞する事が出来るのなら、その逆に分子の動

きを活発にする事も可能だろう。

人体の水分子が猛烈な勢いで活動した結果として、キュールの体内には熱力ロリーが発生し、身の内からキュールを焼いている。自分の内から発生する物に対しての防御方法など存在しない。

「ぐつつがああー！離せ、離せえええー！！！」

熱さに耐え切れず、キュールが身をよじるが、右手は鉤爪に捕らわれて動かな

左手を切断されていなければ右腕を切り落とす事も出来ただろうが

……もはや

逃げられない。

「え、う……げぼー！！」

溜まらず吐き出したキュールの吐瀉物は血だった。

地面に落ちたそれが水蒸気を上げている……キュールの体内温度が何度になっているのか、考えたくもない。

「う……ごぼー！！」

キュールの体が真っ赤になっている。

キュールの体が壊れて行く。

血管が破れ、熱い温度を持つ血を全身から噴き出し、地面に落ちたそれが草木を焼いた。

「あ……あ……お、がはー！！」

キュールの体が松明のように燃え上がる。

とうとう限界を超え、体内温度が人体発火を起こすまでに高まったのだろう。

肉の焼ける嫌なにおいが周囲の森に充満する。

「……………」

キュールが燃え尽きると、ウンディーネの掴んでいた腕だけが人としての形を保って残っていた。

「…タイト？」

ガサリと草を掻き分け、背後に立ったリインにウンディーネは振り返らない。

「…やはり”代償”を支払ってしまったのか？」

リインだけでなく、チェンジリングや彼らを良く知る者たちの間には、とある一節の言葉が口伝で受け継がれている。

【汝、心だけは取り替えるなかれ】

この言葉こそが、【リミット・ブレイク】が禁忌とされる理由だ。

心の取替えなど、当然だが決して成立しない。

何故ならば、魂は己の肉体に惹かれるものだから…肉体が楔となり、心の交換はチェンジリングが望んでも起きない。

だが…【リミット・ブレイク】は違う。

100%以上の同調率をたたき出し、全身を取り替えた時、両者の境界線は崩壊する。

チェンジリングの魂が戻るべき肉体は逆に”彼ら”の領域に存在し、彼等の体は“我々”の世界に存在する。

その結果、チェンジリングの魂は彼等の領域に引かれ、彼等の魂はこの世界に現れた肉体に引かれる。

その結果起こるのが魂の交換と…体が裏返り、魂が裏返る…一人の人間がいなくなり、一体の実体を持った完全な精霊・妖精が現れる。後戻りが出来なくなるが故の、【リミット・ブレイク限界点超え】…チェンジリングの間では向こう側に行ってしまうことを指して”代償”と呼ぶ。

それは一瞬とはいえ、人の手に余る精霊・妖精の力に手が届いた報いか…それとも当然の代価か？

「だめだ、タイト…戻ってこい！！」

リインが呼びかける。希望がないわけではない。

戻ってこれないと言われていても、それが証明された事もまたないのだ。

向こう側に行ってしまったら本当に戻って来られなくなるのか…実

体を持った精霊・妖精がどうなるか…そもそもリミット・ブレイクに至ったものが誰もいないのだから調べようがない。

だから…希望はあると信じたい。

「タイト！？戻って来い！！」

二度目の問いかけは強めに…そして願いを込めた。

次々に押し寄せてくる不安に押し潰されてしまいそうになりながらも…それでも口を開き、声を出せたのはリインだからこそだっただろう。

そのせいかどうかはわからないが、リインの見るウンディーネの背中に変化があった。

視界に映る蒼の背中が大きくなってきている。

リインに背中を向ける形で…ウンディーネが滑るように近づいてくるのだ。

やがてリインとウンディーネが重なり、一つとなり、蒼の騎士は真の主である少女の中に消えた。

「ウンディーネ…」

リインは自分の中の欠けていた部分が補完されるのを感じた。

生まれたときから共にあった存在の帰還に、リインは胸に手を当てて安堵のため息をつくとはっとして前を見る。

「タイト？…ウンディーネが戻ってきたと言うことは、タイトはどうなった？」

見れば、やはりそこには背中があった。それは精霊の物ではなく、黒の後姿だ。

「…戻って来たのか…タイト？」

三度の問いかけ…リインはタイトの背中だけを見ていた。

あえてタイトの背中に注視しているのは、周囲の状況が凄惨過ぎるためだ。

飛び散ったキュール”だった物”の熱で不快に蒸し暑く感じる。

それらを直視して、自制できる自信が彼女にはなかった。

煮だった肉の匂いに、湧き上がってくる吐き気を飲み込みながら…

リインは震えていた。

今の自分を見て、笑いたい奴がいれば笑えばいいと思う…それでもリインは心の底から恐怖している…目の前にいるのは果たして何者なのか…タイトか、それと別の物か？

「…タイト？」

様々なものを抱えながら、リインは最後の問いかけと共にその肩に手をかける。

タイトは答えない…まさかと言う思いにリインの心臓が高く早く鼓動を刻み、同時に「やはり、そうなのか」と思う自分がいた。

「え？」

あつさりと抵抗なく、肩にかけた手に引かれるまま振り返ったタイトに、リインは面喰らい、脱力したタイトが自分の胸の中に倒れこんできて押し倒される。

「あ、痛った！」

二人分の体重と共に倒れこみ、打ち付けた背中に感じる地面の感触でリインは正気に戻る。

「こ、こらタイト！お主な…にを…」

リインの言葉が尻すぼみに消える。

自分の腕に生暖かい温度とぬるりとした感触を持つ物が触れた事に気づいたからだ。

「…え？」

リインはこの感触とにおいを知っている。

見れば、まだ新しい血が手を濡らしていた。

「ま、まさか…」

リインはタイトが致命傷に近い傷を負っていた事を思い出す。

そして、キュールとの戦いでは瞬時に回復できないほど深く右肩を挟まれ、毒まで受けていたはず…もし、それが完治する前に取替えが解除されていたとしたら？

「お、おいタイト！？」

大声で名前を呼ぶがタイトは反応しない。

ぐったりしていて身動きもしない様は、そのまま死体のようにも見えて、リインの顔が真っ青になる。

「ちょ、ちよつと待て、このまま死ぬな！！死んでしまっぞ！！」
リインも焦っているため、言っている事が支離滅裂だ。

今の彼女はタイトの体に押し倒されているため動けない。

本調子なら何の事ないが、彼女もまた毒を受けている上に少ない出血もしているために本調子とは言いがたく、押し除けるだけの力が出ない。

なのに目の前のタイトは血まみれで、何処の傷から出血しているのかも確認しなければわからないという一刻を争う有様だ。

黒の服で隠れているが…布地が重いのは血を吸ったせいか？

まずいと、これ以上は本当にタイトの命にかかわると、危機感が刺激されたリインの焦りが加速する。

「タイト！！起きろタイト！！このままでは本当に死んでしまっぞ！！え？」

タイトの体を何とか押しのけようとしたリインの目の前で、タイトの体が淡い光に包まれた。

「これは…取替えの…ウンディーネ？…いや、違う？」

ウンディーネは反応していない、リインの中にいる。

取り替えるべき対象がいらないのに、タイトに対して取替えが行われようとしているのか？

「あ…」

リインの両手が空を切った。

押し付けていた物…タイトの体が消えた為に、地面に仰向けで倒れたまま空に手を伸ばす形になる。

「タ…イト？」

幻のように消えてしまったが…夢ではない証拠に、自分の手に残っているタイトの血はまだ温度をなくしてはいない。

リインは呆然と…立ち上がることも出来ずに突き出した両手の先の蒼空を見上げる事しか出来なかった。

「おつかれ」

「はいはい、お疲れさ〜ん」

人がまばらになった校舎に少女達の声が良く響く。

昼間は最上の人口密度を誇る学校と言う世界も、日が沈み始めた時間帯になれば一気に人がいなくなる。むしろ、こんな時間に校舎内にいる人間の方が稀だろう。並んで歩く二人はどうやらその稀な部類の人間らしい。

学校指定のバック以外に、自前のスポーツバックを持っているところを見ると、部活の帰りのようだ。

「そんで？」

「うん、それからね…あの子が…」

少女達は日常の他愛もない話に笑い、少し拗ねた振りをして話を盛り上げながら笑って歩いている。

「…ん？」

「…あれ？」

二人揃って足を止めた。背後、直ぐ側で何か物音がしたのだ。

何か落としてしまっただろうか、背後を振り返った二人は同時に

…日常の中に突然現れた非日常な物を見る。

まず…少女達の目が血まみれで倒れている人影を見て…次いでその鼻が血臭をかぎ…耳が苦しげな声を聞き取った。

「き、きやああああ!!」

「いやああああ!!」

黄昏に染まる校舎に、少女二人の甲高い悲鳴が反響する。

クス…。

どこかで……誰かがこっそり笑ったような気がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9398z/>

妖精郷幻想忌憚

2012年1月5日20時13分発行